

# 萩藩医坪井信道

——萩藩における蘭学導入の経緯について——

森 川 潤

(受付 2010年11月1日)

はじめに

日本海海岸にはしばしば唐船が漂着していたが、19世紀になると、日本近海に欧米の捕鯨船が出没しはじめただけでなく、ロシアをはじめ欧米諸国の船舶が来航するようになる。萩藩学明倫館書物方の任にあった村田清風は、海防策を講じる必要性を認識する。

軍法ニ、我を量り彼を知り而後に戦の勝敗ハ分る事之由、然處清風貳十四歳之比魯細亞事起り侯ニ付、御國江戸御番手中ともに、都而海寇事之書物は藏置侯、尤外國之事之書物ニ、すへて國禁の法ニ付、門外不出之掟ニ而、堅く不免他見侯へとも、拙者一人存シ侯迎も、御國の御役ニ相立侯事ニ而無之事ニ付、追々志厚心掛ある人ハ、平安古の茅屋え招きよませ申侯<sup>1)</sup>

文化3(1806)年の文化の露寇を契機として、清風は「我を量り彼を知」るために明倫館書物方として江戸在勤の藩士とともに「海寇事之書物」を収集する。「彼を知」るためには、「外國之事之書物」、すなわちオランダ語でしるされた海外情勢に関する書籍を繙読しなければならない。それによって、「我を量」る、すなわち「海寇」に対峙することが可能か否か判断することができる。しかし、江戸でも、西洋医書の翻訳が本格化しはじめたばかりである。藩内にはオランダ語の原書を解説するものはいない。

清風は、天保9(1838)年に地江戸両仕組掛を命じられると、江戸の「三大西洋家」のひとりである坪井信道<sup>2)</sup>に江戸勤番の萩藩士の診療を嘱託する。信道は、萩藩の下屋敷の近所に居をかまえていたために、もともと藩邸詰めの萩藩士の診療のために藩邸に出入りし、清風や藩主側医の能美洞庵とも私的に親交をむすんでいた。清風は、翌天保10(1839)年にはさらに江戸当役用談役を命じられ、藩政改革を主導する。この年には、洞庵と信道の推薦により信道門下の青木周弼が一代雇の萩藩医に登庸される。

天保11(1840)年9月、萩の南苑御茶屋内に萩藩医学館が創設される。開講時には9つの開講科目のうち、5科目が漢方医学であり、4科目は西洋医学である。赤川玄成、烏田良岱、和田昌景、青木周弼が西洋医学を担当し、それぞれ「医療正始」、「外科必読」、「眼科新書」、「翻訳」を担当する<sup>3)</sup>。前3科目は翻訳書により西洋医学を講じるにすぎない。本格的にオランダ語をまなんだのは、周弼だけである。

青木周弼は、享和 3 (1803) 年に周防大島地下医の長男に生まれ、文化 11 (1814) 年に萩藩主の側医能美友庵の学僕になる。天保 2 (1831) 年ころに江戸にのぼり、坪井信道、宇田川玄真に師事し、天保 10 (1839) 年 2 月に世襲制が根強い萩藩の一代雇の藩医に登用される。医学館が開講すると、蘭学教授を命じられ、「翻訳」を担当するかたわら、「蘭書シヨメール」の翻訳にたずさわる<sup>4)</sup>。周弼に期待されたのは、藩医としての役割ではない。嘉永 2 (1849) 年 1 月には手廻組にくわえられ、嘉永 3 (1850) 年 6 月には譜代藩医に補任され、嘉永 4 (1851) 年 1 月には御添匙医、安政 2 (1855) 年 8 月御側医と栄進する。萩藩医学校は、医学館、済生堂、好生館、好生堂と改称するが、周弼は、嘉永 2 (1849) 年 1 月には医学館会頭役、文久 3 (1863) 年 4 月には好生堂教諭役を歴任する。

坪井信道は、萩藩領出身者を蘭学者として育てただけでなく、萩藩お抱えの蘭学者として、萩藩に蘭学を導入する基盤をきづく。江戸の蘭学は、宇田川玄真によって大成され、その流れをさらに発展させたのが門人の坪井信道である。江戸の蘭学の主流である<sup>5)</sup>。宇田川・坪井の学統、あるいは学風は、「信道門下の三哲」のひとり<sup>6)</sup>である青木周弼により萩藩の蘭学にうえつけられる。

青木周弼は、萩藩に蘭学が導入され、定着する過程において、つねに主導的な立場にいた。周弼のよって萩藩に導入され、定着した蘭学はどのような学統、あるいは学風のものであったのであろうか。本稿では、周弼の蘭学の師である坪井信道がどのような学統を継承し、それをどのように展開させ、さらに、信道が萩藩医としてどのように萩藩に蘭学を導入する基盤をきづいたか、あきらかにすることを課題とする。なお、本稿では、蘭学の概念を、オランダ語を習得することにより、蘭書、すなわちオランダ語で著述された原書にもとづき西洋の学術・技術を移植しようとする学問というひろい意味でとらえる。

## 一 西洋医学への転向

坪井信道は、寛政 7 (1795) 年、美濃国池田郡<sup>はぎなが</sup>脛永村の農民坪井信之の 4 男に生まれる。貧困のなかで、寛政 8 (1797) 年に長兄と次兄が出家する。文化元 (1804) 年に父がなくなり、近江長浜の福寿院に住する長兄浄界のもとにひきとられる。信道は「岐阜城主中納言織田公諱秀信」<sup>7)</sup>の後裔という「先考ノ家名ヲ相續スヘキ」立場におかれる<sup>8)</sup>。信道は、浄界から医家として身をたてるようすすめられ、浄界の友人である儒医渡辺奎輔のもとで句読をまなびはじめ。文化 3 (1806) 年、脛永村の親戚のもとに寄食する母なのが没する。そのころ、信道は尾張藩儒官の泰滄浪 (泰鼎) にあずけられる。翌 4 年には、浄界につれられ、江戸におもむき、中津藩儒官の倉成龍<sup>りゅうしよ</sup> 渚の家塾に入門する。江戸へ出たのは、渡辺奎輔が倉成塾に寄寓していたからである。奎輔は、のちに膳所藩の侍医に登用される。信道は、1 年後には名古屋につれかえられ、ふたたび泰滄浪のもとに寄食する。信道は、その間、断続的ながら漢

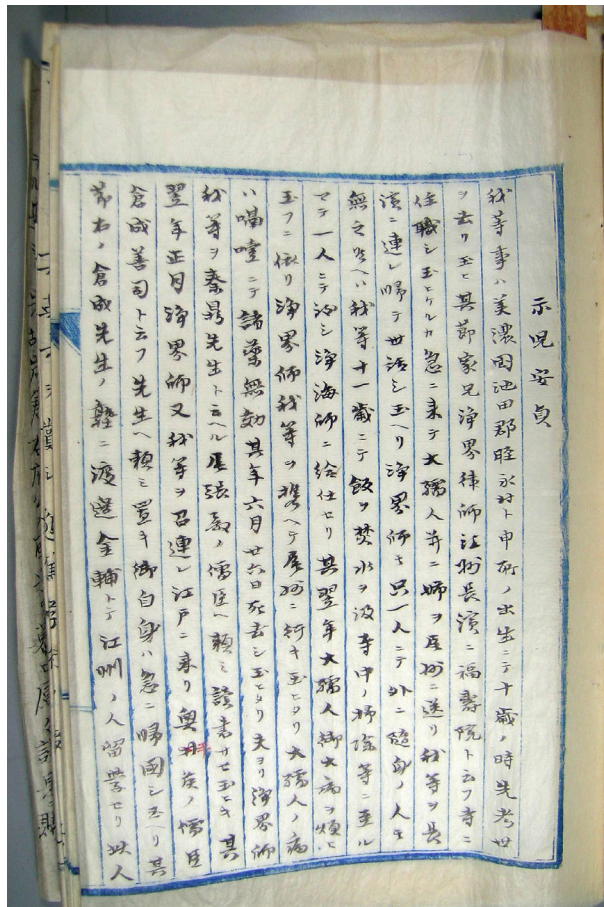


図1 「示児安貞」

学の基礎をまなぶ。

文化8(1811)年、信道は滄浪から尾張藩医の金沢家の養嗣子になるようすすめられる。医家としての資質をみとめられたとしても、信道には一家再興の悲願がたくされていた。信道は、滄浪のもとから出奔し、豊前中津へおもむく。倉成龍渚が勤番のために中津に滞在していたためである<sup>9)</sup>。龍渚は、寛延元(1748)年に豊前宇佐郡に生まれ、23歳のころ、京都にのぼり、伊藤仁斎の孫にあたる東所の門人になり、古義堂に寄食する。帰藩後は、5代藩主奥平昌高につかえ、寛政2(1790)年の藩学創設に参画する<sup>10)</sup>。翌年、龍渚が勤番のために江戸にのぼったために、信道は筑前、肥前、豊後、肥後を巡歴し、儒家や医家のもとに寄食しながら、漢方医学と詩文の修業にはげむ。詩文は、当時の儒者や市井の知識人の教養として重視されていた。

信道は、文化10(1813)年に豊後日田におもむき、豆田村の漢方医三松斉寿(蘭雪)のもと

に寄寓する。齊寿は、熊本藩医村井椿寿（琴山）の門人である。椿寿は、古医方の大家吉益東洞のもとで研鑽し、みねしやうおう岑少翁とともに東洞門下の名医と併称される<sup>11)</sup>。椿寿は、京都から熊本にかえったのち九州各地をめぐり、『傷寒論』を講説する<sup>12)</sup>。信道は、巡歴中に村井椿寿の名声を耳にしたが、椿寿がすでに80歳をむかえていたために、その高弟の齊寿の門人になったのであろう。椿寿は、文化12(1815)年に没する。

信道は、3年間、日田にとどまる。その間、齊寿のもとで修業する。吉益東洞の『方極』、『類聚方』、『薬徴』の3部作を読破したのであろう。3部作は、いずれも漢方医学の原典といわれる『傷寒論』や『金匱要略』に依拠するものである。信道は、日田では、漢方医学を修業しただけでなく、広瀬淡窓としたしくまじわる。齊寿は、淡窓の主治医でもあり、詩文をこのむために淡窓と私的にも親交があった。信道は、齊寿に紹介され、しばしば淡窓の桂林園をおとづれる。淡窓は、天明2(1782)年に豊後日田豆田村の商家に生まれ、寛政9(1797)年に亀筑前福岡のひえいかん亀井南冥・昭陽父子の蜚英館に入門する。文化4(1807)年に郷里日田の東偏裏町に桂林園、のちの咸宜園をひらく。咸宜園は、淡窓の没後にも淡窓の養子青邨が塾主となり、明治30年6月まで存続する。淡窓が「始メテ（水岸寺）密如ニ代ツテ孟子ヲ講シタリ」<sup>13)</sup>という享和初年から廃止までに、64カ国4627名が咸宜園に入門する<sup>14)</sup>。そのなかには、高野長英、岡研介、大村益次郎、上野彦馬、松田道之、長三州といったあたらしい時代をきりひらく逸材もいた。周防灘をへだてた萩藩から咸宜園へ遊学するものもおおい。

信道は、文化10(1813)年5月には、淡窓の詩会にくわわり、「仲夏桂林園小集。得長字」<sub>レ</sub>と題する漢詩をつくる<sup>15)</sup>。淡窓が日記にははじめて「坪井環」の名をしるしたのは、文化10(1813)年10月19日のことである<sup>16)</sup>。信道は、当時、「環」を名のっていた。

午後會<sub>レ</sub>於藤大春晚晴樓。僧密如。諫山安民。熊谷昇。相良茂。坪井環。萩野肩吾。在焉。飲<sub>レ</sub>酒賦<sub>レ</sub>詩。入<sub>レ</sub>夜而散。

10月19日午後、淡窓は藤大春の晩晴樓、すなわち三松齊寿の居宅でひらかれた詩会に参加する。その席には、淡窓の門人だけでなく、信道もくわわり、酒をあじわいながら詩を詠む。信道は、翌文化11(1814)年2月26日の詩会にもくわわる<sup>17)</sup>。

雨。午後登<sub>レ</sub>觀音閣。小酌永興寺。分<sub>レ</sub>韻。賦<sub>レ</sub>詩。得<sub>レ</sub>一絶句。會者。齊壽。琴臺。安民。昇。伊織。茂。環。子謙。日入還<sub>レ</sub>桂林園。談論移<sub>レ</sub>時。二更而散。

信道は、淡窓の朋輩とともに慈眼山の觀音閣にのぼり、ようこうじ永興寺で酒をくみかわしながら賦詠する。日没後、桂林園にもどり、深更まで談論をたのしむ。このとき、信道も七言絶句を詠む。信道は、そのときの情景をつぎのようにしるす<sup>18)</sup>。

仲春太佳城。衝<sub>レ</sub>雨看<sub>レ</sub>花。広廉卿及諸子相約言。登磴之間。各題<sub>レ</sub>七言絶句一首。廉卿先成。余次成。

淡窓は、四季折々に花鳥風月を愛で、詩会をもよおす。信道は、しばしば淡窓の詩会にく

わわる。8月には観月会がひらかれる<sup>19)</sup>。

未時赴<sub>レ</sub>観月會<sub>ニ</sub>。義策從焉。會<sub>ニ</sub>清音亭。熊谷昇爲<sub>レ</sub>主。三松齊壽。坪井環亦至。酌<sub>レ</sub>酒賦<sub>レ</sub>詩。予得<sub>レ</sub>絶句五首。僧密如。諫山安民。佐藤琴臺。期而不<sub>レ</sub>至。三更後歸<sub>レ</sub>家。

淡窓は、9月には紅葉狩りのために郊外にでかけ、桂林園にもどり、煎った茶の芽を肴に酒を酌む。すでに詩会がはじまり、信道もくわわる<sup>20)</sup>。

出<sub>レ</sub>郊觀<sub>レ</sub>楓。因到<sub>ニ</sub>桂林園<sub>ニ</sub>。過<sub>レ</sub>堤到<sub>ニ</sub>坡上<sub>ニ</sub>。煎<sub>レ</sub>茗酌<sub>レ</sub>酒。隨者。環。肩吾。司馬太。令助。秋望頗佳。

信道は、齊寿が調合した薬をとどけたりすることもあった<sup>21)</sup>。

病色如<sub>レ</sub>故。然猶講<sub>ニ</sub>戰國策<sub>ニ</sub>。刪<sub>ニ</sub>潤舊作<sub>ニ</sub>。及<sub>レ</sub>至<sub>ニ</sub>午後<sub>ニ</sub>。三松齊壽使<sub>ニ</sub>門生坪井環<sub>ニ</sub>遣<sub>ニ</sub>藥一貼<sub>ニ</sub>。

文化11年5月6日、淡窓は脱肛に苦しんでいたが、『戦国策』を講じる。午後になり、信道がおとづれ、脱肛の貼り薬をとどける。

信道は、文化12年10月、肥後熊本におもむき、村井椿寿の墓にもうでる。加藤清正の廟堂にももうでる。信道は、旅にでかける9月24日にも、旅からかえった10月14日にも淡窓のもとにでむく。淡窓は、日記に「坪井環將<sub>レ</sub>遊<sub>ニ</sub>肥後<sub>ニ</sub>來別」,「坪井環將<sub>レ</sub>自<sub>ニ</sub>肥後<sub>ニ</sub>歸來見」としている<sup>22)</sup>。

信道は、文化12年10月7日、留別のために淡窓をたずねる。淡窓は、その日、『懐旧楼筆記』につきのようにしるす<sup>23)</sup>。

尾州ノ醫生ニ坪井環ト云フ者アリ。三四年來。三松齊壽ノ家ニ寄寓シテ。醫ヲ學ヒ。常ニ余カ家ニ往來セリ。極メテ才氣アリ。志願アル者ナリ。此年ノ冬當彊ヲ辭シ去リシカ。其後モ兩三度來遊セリ。

桂林園には、全国各地から俊秀があつまっていた。淡窓は、門生でもない若い信道の才気を愛し、信道への惜別の想いをつづる。10月27日には、齊寿の家にてむき、信道に饞別をおくる。

淡窓は、のちに「此ノ人（信道）後年東都ニアリ。稱ヲ改メテ信道ト云フ。蘭學ヲ唱ヘ。當世ノ一名家トナレリ。余カ門人醫ヲフ者。往々其門ニ入レリ」としるす<sup>24)</sup>。咸宜園の門生になかには、漢学の基礎的教養を身につけたのち、信道の蘭学塾にすすむものもいた。淡窓がすすめたのであろうが、淡窓は、門生をあずけるほどに信道に信頼をよせる。

古代以来、漢字文化圏にくみいれられた日本では、漢文が学術的な内容を記述する文章であった。蘭書の翻訳にさいしても、漢文がもちいられた。蘭学者は、蘭書の翻訳にさいし、漢方医学の語彙をそのままあてはめ、漢方医学に相当する語彙がないばあいには、あらたに漢字の訳語を考案する。そのために、「訳文の口調を整えるためにも漢文読み下しの影響の強い一種の文体」である漢文体が採用される<sup>25)</sup>。蘭学にすすむためには、漢学の素養をやし

なわなければならない。

信道は、文化12(1815)年、豊後中津におもむき、淡窓の紹介により辛島成庵をたずねる。信道は、成庵のもとに寄寓するうちに、宇田川玄真が訳述した『医範提綱』を一読する。付図の『医範提綱内象銅板図』も閲覧したであろう。中津藩は、前野良沢以来、蘭学の伝統があり、藩医である成庵の家にも西洋医学の翻訳書も架蔵されていた。信道は、「番夷ノ説取ルニ足ラストシ齒牙ノモカケサリシ」が、「始メテ其説ノ切實ナルヲ知り」、蘭学修業を決意する<sup>26)</sup>。

信道は、翌文化13(1816)年夏に広島におもむき、広島蘭学の祖である中井厚沢に師事し、「西洋翻譯書數部」を読む。厚沢は、長崎で吉雄耕牛に師事し、江戸では大槻玄沢に師事し、すでに西洋医学20年の経歴があった。同門の岡研介とは終生親交をむすぶ。信道は、秋には、下関にうつり、「術ヲ試ム」。下関には1年半滞在し、「病客千五百人ヲ歴驗シ」、江戸に遊学する資金をたくわえる<sup>27)</sup>。研介は、その後、信道のすすめにより、豊後日田の広瀬淡窓、福岡の亀井昭陽の門にはいり、さらに文政7(1824)年には長崎におもむき、シーボルト (Philipp Franz von Siebold) に師事する。鳴滝塾の最初の塾長になり、高野長英とならびシーボルト門下の双璧と称される。

## 二 師宇田川玄真

信道は、西洋医学に転向し、厚沢のもとで蘭学の初歩をまなんだであろう。しかし、翻訳医書を読むことはあっても、本格的にオランダ語を学習することはなかった。文政3(1820)年、26歳になった信道はようやく江戸にのぼり、4月に宇田川玄真の風雲堂に入門をゆるされる。玄真は、寛政9(1797)年12月に玄隨が没したのち、宇田川家の養子にむかえられ、津山藩藩医として安定した経済基盤のうえで西洋医薬書の訳述に専念していた。宇田川玄真によって大成され、門人の信道がその流れをさらに発展させたといわれる蘭学とはどのようなものであったであろうか。

江戸の蘭学の草創期、すなわち前野良沢を中心とするグループが『解体新書』の翻訳に着手したころには、蘭学はつぎのような状況であった<sup>28)</sup>。

往年艸創ノ頃ハ固ヨリ其文法ノ沙汰ニアラズ僅ノ數語ヲ記シ拾ヒ讀ミシテ其義ヲ推究セシトイフコトハ蘭學事始ニ云ヘルガ如シ當時其每語サヘ慥カニハ解シカ子シナレバナカナカ其所ニ及バズ實ニ只諸先覺ノ精力ノ厚ク志ノ深キニ出タルコトナリ翁ガ此學ニ入りシ中頃ハ漸ク蘭化師ノ覃思研精ニテ彼文章ノ中ナル點例ノコトナドモ稍開ケ又原文ヲ抄書シテ每語ニ譯ヲ施シ和法ノ廻環逆讀ヲ爲シ推シテ其意義ヲ會通スル等ノ教モ起リテ可ナリニ其所説ヲ解シ得タルナリコレハ我蘭化師ノ蒙生ノ爲ニ假リニ設ケシ新例ニ出タルナリ

『解体新書』の翻訳にたずさわった人びとは、前野良沢が長崎で記憶したオランダ語のわずかばかりの単語を手がかりとして、一語一語の意味をさぐりながら文脈をたどる。解体新書グループのつぎの世代の大槻玄沢は、良沢が初学の門人のために天明5(1785)年に編集した『和蘭訳筈』により訳業にあたるが、語彙もとほしく、冠詞、代名詞、前置詞などの「助語」の知識、すなわち文法や構文に関する知識がないために蘭文の訳読法は未熟であった。良沢は、オランダ語と漢語の構造の類似点に着目し、蘭文の翻訳に「廻環逆讀」という漢文訓読の方法を導入し、文意をくみとろうと試行錯誤をかさねていた。未知の外国語を理解し、訳読するさいに、おなじ外国語である漢文の訓読法を適用しようというところみである。

玄真は、当時の他の蘭学者と同様に、もともと漢方医学をこころざし、古方派が依拠する『傷寒論』の研究にとりこんでいた。寛政2(1790)年、22歳のときに漢方医学を修業するために江戸におもむき、「漢學に厚く博覽強記の人」である津山藩医の宇田川玄随<sup>29)</sup>に師事する。玄随も、「西洋鑿術」について「不<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>否<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>ト<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>排<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>ヲ<sub>レ</sub>」<sup>30)</sup>、すなわち善惡の問題ではなく、西洋医学は謬説であると考え、顧みることはなかった。しかし、安永8(1779)年、25歳のときに幕府奥医師の桂川家第4代の桂川甫周と仙台藩医大槻玄沢に出逢い、西洋医学へとみちびかれる。それは、「屢々聞<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>廻<sub>レ</sub>始<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>徵<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>據<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>嘗<sub>レ</sub>嘗<sub>レ</sub>虛<sub>レ</sub>設<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>空<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>」、すなわち西洋医学の説を聞くうちに、西洋医学が信実明徴であり、実物にもとづき論説し、虚偽を空論することがないと考えられるようになったからである。日本最初の西洋解剖書の訳書である『解体新書』の安永3(1774)年の刊行を契機として、江戸に蘭学隆盛の兆しがみえはじめた時期である。

西洋医学へ転向した玄随は、まず西洋医学の基盤となるオランダ語を習得するために、大槻玄沢、前野良沢に教えを乞う。白河藩主松平定信に禄仕する石井恒右衛門、すなわち馬場清吉、荒井庄十郎、すなわち森平右衛門といった元長崎通詞にも師事する。当時、著聞の蘭学者や長崎通詞に師事しただけでなく、長崎通詞志筑忠雄、すなわち中野柳圃があらわした『助詞考』を書写し、オランダ語の助詞についてもまなぶ<sup>31)</sup>。

玄随は、蘭学をこころざしてから5年後の天明4(1784)年には、桂川甫周のすすめにより『内科撰要』の翻訳にとりかかる。玄随の代表的な訳著である。原著は、オランダ人内科医ゴルテル(Johannes de Gorter)が1744年に刊行した『精選医学、大多数の内科疾患に関する短い手引、海戦や野戦に従軍したり、またはその他の場合にこのような病気を取扱う必要を生じた外科医が利用するために』(Gezuiverde Geneeskunst of kort onderwys der meeste inwendige ziekten; ten Nutte vanchirurgyns, die ter zee of velde dienende, of in andere amstedigheden, zig genoodzaakt vindendusdanige ziekten te behandelen)である<sup>32)</sup>。玄随は、寛政4(1792)年に『内科撰要』18巻を訳了する。それは、「本邦内科書新訳ノ始」である<sup>33)</sup>だけでなく、「江戸の本格的な西洋医学書の翻訳」に先鞭をつけたものでもある<sup>34)</sup>。

西洋医薬書の翻訳にたずさわる過程において、玄随は蘭文典や医学用語辞典を編集する。『蘭訳弁髦』は、『内科撰要』を翻訳する過程において翻訳方法を考案し、寛政5(1793)年ころにまとめた江戸ではじめてのオランダ語文法書である<sup>35)</sup>。師事した元長崎通詞からオランダ語の翻訳のために文法が重要であることをさとされたからであろう。『蘭訳弁髦』は、「オランダ語の一語一語に日本語を対応させるとともに、漢文訓読的な語法を用い、全体として欧文訓読法とも呼ぶべき訳述法」を採用する<sup>36)</sup>。大槻玄沢の「廻環逆讀」という漢文訓読の方法をとり入れたものである。

玄真が玄随の門弟になったころ、玄随は西洋医学に転向してから10年あまりたち、『内科撰要』の翻訳にたずさわっていた。

行ク行ク將ニ此學ニ入ラントス請フ近年ヲ待テ先生ニ託セン先ヅ今専ラ漢醫ノ書ヲ研究セシム<sup>37)</sup>

玄随は、玄真にしばらく「漢醫ノ書」を読ませ、「其才の固密なるを知りて蘭學に引導せん」と決意する。やがて「漢学の弟子」である玄真に「蘭字の書方まで」おしえる<sup>38)</sup>。玄真は、玄随により西洋医学へと嚮導され、本格的にオランダ語の学習にとりくむために、「師命」により大槻玄沢に師事する。玄沢のもとで『蘭言譯語』という蘭和語彙集を書写し、構文や翻訳法をまなぶ。玄真は、やがて玄沢の推挙により嗣子のいない杉田玄白の屋敷にうつりすむ。玄白は、二女八曾に娶せるつもりであった。玄真は、玄白が「大部の物といへども力の及へる程ハ費へを厭す購ひ求め」た蔵書を読みあさり、「進める事も又速にして其功昔日に倍せり」といわれるほどに蘭文の読解力を身につける。しかし、玄真は「客氣盛の最中なれハ身持至て放蕩となり」、離縁になる<sup>39)</sup>。

一介の書生にもどった玄真は、芝蘭堂同門の鳥取藩医稲村三伯がたずさわる蘭日辞書の編纂をてつたう。三伯は、寛政4(1792)年閏2月、「昔蘭學階梯ニ因リテ翁ガ名ヲ其郷ニ識リ白髮書生トイフヲ以テ遙ニ東遊シテ翁ガ門ヲ扣ク」<sup>40)</sup>。玄真が大槻玄沢の芝蘭堂に入門してから2年のちのことであるが、三伯は玄真よりも10歳ほど年長の33歳であった。ふたりは義兄弟として敬慕しあう間柄である。

三伯が芝蘭堂に入門したのは、『蘭学階梯』により蘭学を独学していたさいに、つぎの記述を目にしたからである<sup>41)</sup>。

先ツ初メハ怠リ無ク單ヘナル言辭ヲ多ク記-臆スヘシ(中略)一語二語ツ、モ習フニ從ヒ聞ニ任セ別ニ一-小-冊-子ヲ作りアベセ二十五字ニテ部-類ヲ立テ置キ「ヘーメル」ト云フ語ヲ得レハh字ノ部ニ記シ天ト云譯-字ヲ添ヘヨ

入門をゆるされた三伯は、玄沢に懇請する。

此學ニ信服ストイヘドモ公暇ニ日月ノ限リアリ請フ師彼邦釋辭ノ書ニ就キ次ヲ逐ヒ口授セヨ從テコレヲ筆録シ郷ニ歸テ斯學ヲ務ルノ基本トセン<sup>42)</sup>



三伯は、鳥取藩主池田治道から3年の暇をもらい、その間、玄沢のもとで「彼邦釋辭ノ書」にもとづきアルファベット順に配列したオランダ語の語彙集を作成することになる。玄真は、「此人ニタヨリテ其傳ヲ受ケヨ」と、「前ノ和蘭譯司ノ馬場某ナル人」、すなわち石井恒右衛門を紹介する。恒右衛門は、オランダ通詞の時代には馬場清吉と称していた。三伯は、恒右衛門のもとで「『ハルマ』トイヘル西哲ノ編集セル釋辭ノ書ヲ以テ韻字ノ次ヲ逐テ總集セル」<sup>43)</sup>。「ハルマ」とはフランス人ハルマ (François Halma) のことである。「西哲ノ編集セル釋辭ノ書」は『蘭仏辞典』(Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen) である。三伯は、玄沢から借りうけた『蘭仏辞典』から見出し語を書き出し、恒右衛門から訳語を聞き、それを書き込む作業をはじめた。

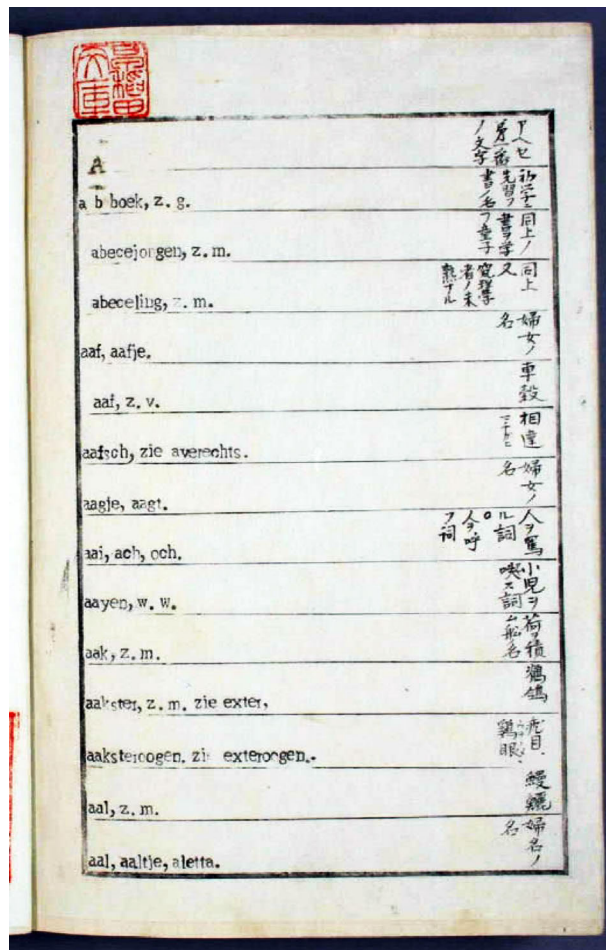


図2 『江戸ハルマ』

玄真は、1年にわたり、「義弟榛齋宇子ト俱ニ之ヲ燈下ニ校擴シ且是正シ一年ノ間毎夕必ス鶏鳴ヲ期ス」<sup>44)</sup>といわれるほどに辞書づくりに専念し、寛政8(1796)年に彼邦釋辭ノ書」を脱稿する。その後、2、3年をついやし、30部あまりを板行する<sup>45)</sup>。全部で2181枚、6万語を取録する。

日本最初の蘭和大辞書である『波留麻和解』<sup>ハルマわけ</sup>、通称江戸ハルマ<sup>46)</sup>は、各丁1段組15行で、図2のとおり、左端に木活字によってオランダ語の見出し語を組み、右端に訳語がしるされる。訳語は、漢字片仮名まじり文で、毛筆でたて書きにしるされる。たとえば、“A”がしるされた罫の右端には「アヘセ第一番ノ文字」と縦に墨書される。30部あまりしか刊行されなかったために、写本が流布する。写本には、語句や表現に添削がくわえられたと思われる。

江戸ハルマが脱稿した翌年、寛政9(1797)年12月、玄随が他界する。玄随には継嗣がなかったために、玄随の門人の江沢養樹、友人の桂川甫周、大槻玄沢の推薦により玄真が宇田川家をつぐことになる。津山藩には、稲村三伯の弟として届けで、津山藩医となる。「皇朝寛政戊午歳十一月廿六日大西洋壹千七百九十有八年『ニューウエヤールダク』」、すなわち寛政10(1798)年11月26日、洋暦の1799年元日に江戸の蘭学者たちが大槻玄沢の居宅である京橋水谷町の芝蘭堂にあつまり、新元会、すなわちおらんだ正月をいわったとき、座興として「蘭学者相撲見立番付」<sup>47)</sup>がつくられる。玄真は、その最高位の東方大関に擬せられる。稲村三伯は、玄真につぐ東方関脇である。行司、すなわち判定者は解体新書グループの前野良沢と杉田玄白である。30歳をむかえた玄真は、江戸の蘭学界では、すでに実力者として評価されていた。

玄真は、すでにオランダ語の読解力を身につけ、蘭書の翻訳にもたずさわっていた。しかし、文化5(1808)年3月、江戸に招聘され、天文方地誌御用に任用された長崎通詞の馬場佐十郎の知己をえたことにより、玄真の蘭学修業はあらたな局面をむかえる。

佐十郎は、長崎通詞志筑忠雄、すなわち中野柳圃の高弟である。佐十郎が江戸に移り住んだことについて、大槻玄沢はつぎのようにしるす<sup>48)</sup>。

皆柳圃ノ遺教ヲ以テコレニ授ク是レ即今都下ノ舊法廢シテ新法正式ニ一變セルナリ譯業第二世宇田川璞玄眞ハ殊ニ此學ニ厚シテ已ニ翁父子ニ謀テ馬生ニ交親シ恒ニ其學ヲ討論シテ専ラ文科ノ學ヲ兼子遂ニ其要領ヲ得ルコト多クシテ益々社中篤學ノ稱ヲ得タリ此モ亦近頃馬場ト翁ト即ニ教ヲ奉スル所ノ翻譯加功ノ台命ヲ奉スルニハ至レリ

「文科」とは、「彼邦ノ雅稱『ガラムマチカ』和蘭ニテ『スプラーカキュンデ』』と呼ばれるもので、「清人ノ即ニコレヲ文科ト譯セルモノ」である<sup>49)</sup>。

馬場佐十郎が江戸に招聘されたことにより、蘭書翻訳にはじめて文法を導入した柳圃の「遺教」が江戸にもたらされる。それは、「都下ノ舊法廢シテ新法正式ニ一變セルナリ」といわれるほどに画期的な出来事である。玄真は、すでに『遠西医範』を訳述し、その内容を簡略

化した『医範提綱』を版行していたが、「翁父子」、すなわち大槻玄沢と息子の玄幹の紹介により佐十郎に師事し、「新法」を会得する。玄真は、「新法」を習得したことにより、「譯業第二世」と呼ばれ、江戸蘭学界に確固たる地位をえただけでなく、文化10(1813)年には「翻譯加功ノ台命」をうけ、蛮書和解御用の訳員に任命される。

佐十郎は、柳圃のもとでまなんだ「新法」について、つぎのように述べている<sup>50)</sup>。

一日就テ問フ先生嘗テ此文式ノ要領ヲ得タルノ由ヲ聞クニ答テ曰余曾テ和蘭人泄物<sup>セウエル</sup>ト云ヘル人著述スル所ノ「ガランマチーカ」ト云フ書ヲ閲シ日夜研究シ後聊カ得ル処アリ今吾子等ニ授ル所是レナリ余モ素ト幸ニ此書ニ因テ積疑ヲ解キ此学ノ大綱ヲ得タリ

柳圃は、オランダ人セウエル (Willem Sewel) があらわした文法書を熟読研鑽し、オランダ語文法を修得する。蘭書の翻訳にさいし長年にわたり疑義をいだいていた点が氷解し、『曆象新書』などの天文学・物理学に関する訳著をはじめとする多岐にわたる訳著を生みだす。セウエルは、18世紀オランダの言語学者である。柳圃が研鑽した文法書は、セウエルが1708年にアムステルダムで初版刊行した『オランダ語文法』(Nederduytsche Spraakkonst)である。

「新法」とは、オランダ語文法の知識にもとづくオランダ語原書の翻訳法である。志築忠雄は、安永6(1777)年に稽古通詞を辞職し、旧姓中野にもどり、柳圃をなのる。玄沢は、天明4(1785)年に長崎におもむき、吉雄耕牛などの通詞と親交をむすぶが、そのころ、柳圃は蘭書の翻訳に専念していた。

文法とは、「単語から文が形成されるにあたっての法則・きまり」である<sup>51)</sup>。オランダ語の規則体系を把握しなければ、正確な翻訳はできない。本格的な西洋医学の研究は、オランダ語の文法という概念が認識され、文法書、語彙集、辞書の編集がすすめられるなかで出現する。

蛮書和解御用は、文化8(1811)年5月に幕府天文方の一局としてもうけられ、外交文書や『厚生新編』の翻訳にたずさわる部局である。開設時には馬場佐十郎と大槻玄沢が訳員を命じられるが、玄真がくわえられたのは、ふたりの推薦があったからであろう。玄真は、藩医としての仕事のかたわら、月に6回程度出仕し、外国文書や『厚生新編』の翻訳にたずさわる。

『厚生新編』は、フランスの百科事典の蘭訳版を翻訳したものである。原本は、フランスの聖職者ショメール (Noël Chomel) が編纂した1709年刊行の2冊本の『家政辞典』(Dictionnaire économique) をシャルモ (J. A. de Chalmot) が増補改訂し、蘭訳した『家庭百科辞書』(Huishoudelijk woordenboek) 第2版(1778年刊)である。オランダ商館にも『家庭百科辞書』が架蔵され、商館長のゾーフは辞書を読みながらビールをつくったりしている<sup>52)</sup>。この翻訳事業には、蘭学者が動員され、文化8年にはじめられ、弘化2(1845)年ころまでつづけ

られる。

玄真は、蛮書和解御用訳員として『厚生新編』の翻訳にたずさわっていたころ、「紅毛学オ一」の称号をあたえられる。名古屋の町医野村立栄は、備忘録に書きしるす<sup>53)</sup>。

○大垣江間春齢 杉田玄白門人也

江戸蘭学学徒

紅毛学オ一 津山 宇多川玄真

死 紅毛讀書達人公儀御抱 馬場佐十郎

仙臺 大槻玄澤

因幡 田中祐碩

阿波 富永晋二

治療ノ方ヨシ 加賀 吉田長淑

翻譯ノ方ヨシ 同 藤井芳亭

同 大高玄哲

右文化十三子年九月十八日羽栗三溪話

小川ハ初宇多川吉田ニ従後京都辻信濃守ニ従

文化13(1816)年9月、名古屋の町医野村立栄(1751~1828)のもとに、江戸からくだったきた吉雄俊蔵がたちよる。俊蔵は、長崎大通詞吉雄耕牛の孫である。すでに『瘍科精撰図符』(文化11年序)、『和蘭内外要方』(文政3年)、『地動或問』(文政6年)、『遠西觀象図説』(文政9年)などの訳著がある。俊蔵は、文化9(1812)年に江戸にのぼり、平田篤胤まくずのやの真管乃屋に入門し、羽栗三溪をなのる。江戸では、津山藩江戸屋敷内の玄真の居宅にも滞在し、養子の榕庵に『六格前篇』をおしえる<sup>54)</sup>。立栄と俊蔵の接点は、立栄が天明2(1782)年に長崎におもむき、吉雄耕牛の家塾に入門したころにあるとおもわれる。立栄は、俊蔵から江戸の蘭学事情について話を聞き、玄真を紅毛学、すなわち蘭学の第一人者であるとする<sup>55)</sup>。吉田長淑と藤井芳亭(諏訪俊)は、宇田川玄随の代からの風雲堂の門人であったが、玄真の推薦により、ともに加賀藩最初の西洋医学の藩医に登用される。藤井芳亭が「翻譯ノ方ヨシ」と評されるのは、つねに筆録者として玄真の訳業を補佐したからであろう。ちなみに、俊蔵はそのまま名古屋に滞在し、吉雄常三となりの、のちに藩医にとりたてられる。

宇田川家をついだ玄真は、津山藩医として安定した生活基盤を獲得し、みずから医薬書を訳述する。「延亨ノ頃ヨリ當今(嘉永5年)ノ名家ニ至マテ」の「西洋學家ノ書目」をリストアップした『西洋學家訳述目録』<sup>56)</sup>の玄真の項にはつぎのような書目があげられる。

増補重訂内科撰要 十八

自初篇至六篇各三冊

醫範提綱 三

同内象銅版之図	一帖
遠西醫方名物考	三十六
自初篇至十二篇各三冊	
同補遺	九
自初篇至三篇各三冊	
和蘭藥鏡	三
軍中備要	二
小兒全書	二

玄真の訳業は多岐にわたる。『医範提綱』は、解剖書である。題簽には『医範提綱』、見返しには『和蘭内景医範提綱』、巻頭には『西説医範提綱积義』とするされる。筆録をゆだねられた門人の藤井芳亭（諏訪俊）は、「題言」につぎのようにしるす<sup>57)</sup>。

榛斎先生<sup>サキ</sup>嚮ニ遠西名醫著ス所ノ人身内景ノ書數部ヲ譯定シ集メ成シテ全部三十卷トシ遠西醫範ト名ク。其中ヨリ全身諸物ノ名及ビ官能ノ綱<sup>ハタラキ</sup>領<sup>オホクグリ</sup>ヲ述べ。別ニ一卷トシテ篇首ニ冠シ。醫範提綱ト名ク。

玄真は、西洋人医師があらわした解剖書数冊を翻訳し、それらを集大成した『遠西医範』30巻を編述する。そのなかから人体各部位の名称とその機能の概要に関する部分を抜粋し、文化2(1805)年に『医範提綱』3巻として板行する。『遠西医範』は、板行されることはなかった。玄真が、宇田川家に入籍すると、玄随の蔵書やあらたに購求した原書を渉獵していたことがうかがわれる。

『医範提綱』は、ふたつの点で蘭書の翻訳史上、画期的な意味をもつ。ひとつは訳文が漢字表記からカタカナ表記へとかわった点である。『解体新書』や『重訂解体新書』が漢文体であるのにたいし、『医範提綱』は本文は漢文体であるが、注文や积義は漢字仮名まじり文でしるされる。それは、玄随の『西説内科撰要』の文体をひきついだものである。

もうひとつは、訳語を創作した点である。脾、腺などの訳語を考案したばかりでなく、小腸、大腸、空腸、廻腸、結腸、乳糜、乳糜管、腸間膜、膈、靱帯などの術語を採用する<sup>58)</sup>。それらは、今日でも使用される。脾や腺は、玄真が作成した国字、すなわち和製漢字である。『解体新書』では、腺を翻訳することができないために「機里爾」<sup>キリイル</sup>，“klier”というオランダ語を発音どおりに漢字で表記する<sup>59)</sup>。幕末の医訳書には、医学用語、術語は玄真の『医範提綱』に依拠したことを明示するものもある。

玄真は、文化5(1808)年には『医範提綱』付図一帳を刊行する。付図<sup>60)</sup>は、銅版画家亜欧堂<sup>でんぜん</sup>田善が直接銅版に線や点を彫って製版した解剖図の銅版画15枚を収録したものである。明和8(1771)年刊の『解体新書』の木版の挿図にくらべれば、はるかに精緻な図版である。

養父玄随は、「從來我 邦ニ於テ遠西ノ醫術ヲ唱ル者大率外科者流ニ過ズ」<sup>オホムネ</sup><sup>61)</sup> といった風潮

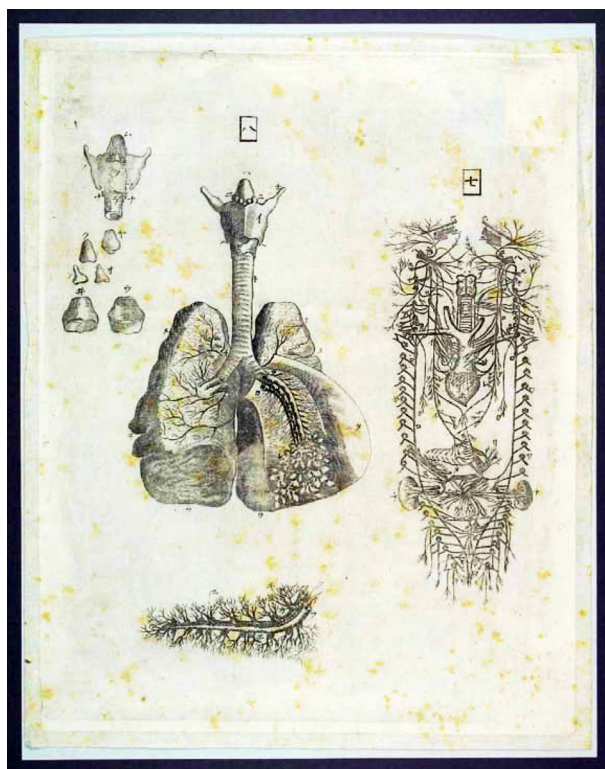


図3 『医範提鋼内象銅板図』

のなかで、「遠西醫術ヲ學ブ者。是ニ蹟<sup>ツヒ</sup>テ講究スレバ略其<sup>ホニ</sup>原<sup>モトツ</sup>キ據ル所ヲ考ルニ足ル」ように『内科撰要』を訳述する。玄真は、玄隨の遺志をつぎ、解剖と外科にかぎられていた西洋医学を内科学、眼科学、小児科学、さらに薬学の分野へとひろげる。

玄真は、寛政11(1799)年に最初の西洋眼科書である『眼病学』を下訳し、それが未定稿のまま『泰西眼科全書』と題する写本として流布する。原著は、ウィーンの陸軍軍医学校ヨーゼフ・アカデミー (Josephinische Medizinisch-Chirurgische Akademie) 教官のプレック (Joseph Jacob Plenck) が1777年にラテン語版 “Doctorina de oculorum” として、1778年にドイツ語版 “Lehre von der Augenkrankheiten” として刊行した『眼病学』である<sup>62)</sup>。プレックの医学書は、18世紀後半に相次いでオランダ語に翻訳され、出版される<sup>63)</sup>。『眼病学』は、1787年にロッテルダムの眼科開業医のプロイス (Martinus Pruijs) により翻訳刊行される。「榛齊譯之。然多事鞅掌。不遑脱稿」<sup>64)</sup>、すなわち玄真が多事多端のために脱稿することができないために、杉田玄白の実子立卿が「和蘭譯官馬君。穀里」の助言をうけながら増補・改訂し、文化12(1815)年に『和蘭眼科全書』として梓行する。同年、『眼科新書』に改題する。構成は、眉病、睫毛病、眼瞼病、涙管病、白膜病、角膜病、眼球病、蒲桃膜病、水様液病、

水晶液病，硝子液病，網膜病など12編からなり，全体で118の症例をとりあげる。

『小児諸病鑿法治法全書』は、日本最初の西洋小児科書である。原著は、「スエーデン國、侍醫」の「ローセン、ハン、ローセンステイン」(Nils Rosen von Rosenstein) があrawし、「レイデン地名醫學館之内外科，解剖科之教諭学師，内科官醫エデュアルド，サンヂホルト人名」が翻訳したものである。オランダ語版は1779年に刊行される<sup>65)</sup>。最終巻の裏表紙見返しに「弘化乙丑仲春 男榕謹装釘」と墨書されている。玄真の没後，弘化2(1845)年に榕菴が稿本を製本したものである。

玄随にも，西洋薬学書を訳述した『遠西薬経』がある。玄真は、「藥品。方劑製煉諸術ノ名物未ダ詳明ナラザレバ臨診施治ノ際。靴ヲ隔テ痒ヲ搔ノ憾ナキト能ハズ」<sup>66)</sup>と考へ，治療のために必要な医薬に関する原書を渉獵する。その成果である『和蘭薬鏡』は、「本格的な植物由来の医薬の書としては最初」のものである。「植物の有効な部分を，どのように化学的にテストし，分類するか」といった課題にこたえる<sup>67)</sup>。

「凡例」には，つぎのようにしるされる<sup>68)</sup>。

和蘭ノ本草及ヒ其薬説ニ關ル書二十餘種ヲ譯定ノ是ヲ和漢ノ諸説ニ稽徴シ名物允當性効確實ナル品物ヲ擇テ形状主治驗方製劑ニ至ルマデ悉ク類纂シ名ツケテ和蘭薬鏡ト云

『和蘭薬鏡』は，オランダの本草書や薬説20部あまりから抄訳し，和漢の本草学の諸説をもとに和漢のものに同定した品類の形状，効能，治驗，製劑などをまとめたものである。文政3(1820)年に初編3巻を公刊する。のちに養子榕菴が改訂増補し，文政11(1828)年から天保6(1835)年にかけて『新訂増補和蘭薬鏡』を出版する。『和蘭薬鏡』は，『医範提綱』と同様に，もはやたんなる翻訳ではなく，臨床に応用するために西洋のいくつかの医薬書から訳出・援用したものである。

『遠西医方名物考』は，「金石土鹽及ビ動物ニ屬スル品物」<sup>69)</sup>，すなわち西洋の「鉱物由来，動物由来の医薬」<sup>70)</sup>をイロハ順に配列し，薬物の産地，形状，製薬法，調剤法，薬効，用法などを記載したものである。玄真が訳述したものを養子の榕菴が校補し，文政5(1822)年から文政8(1825)年にかけて板行する。凡例は榕菴が書きしるす。天保5(1834)年には補遺9巻も刊行される。

玄真が訳述したものを榕菴が校訂・増補したように，玄真は，みずから医薬書を訳述するだけでなく，養父玄随が訳述したものの校訂・増補にもたずさわる。玄随が翻訳した『西説内科撰要』18巻は，その生前には，第9巻までしか刊行されていなかった。玄真は，多くの医師が臨床で活用できるように『西説内科撰要』を補訂し，その刊行をつづけ，文化7(1810)年に全巻を版行しおえる。玄随の訳では，病名はすべて原語に漢字をあて，ルビをつけていた<sup>71)</sup>が，玄真はつぎのように意味をとった病名にあらためる<sup>72)</sup>。

玄随訳 ヨングダアントヘイド 翁傑達安篤竭意度	玄真訳 萎黄病	羅匈名「カセキシア」 和蘭名「オンゲダントヘイド」
シンキンゲン 聖京健	冒寒	羅匈名「カタルリ」 和蘭名「シンキンゲン」
イーグト 伊偪多	痛風	羅匈名「アルトリチス」 和蘭名「イーグト」

玄随の高弟である吉田長淑は、家塾蘭聲堂で西洋医学の学習のために『西説内科撰要』を使用する。長淑の門人高野長英も蘭聲堂で『西説内科撰要』を聴講する。

玄真は、『波留麻和解』の編集にたずさわったが、『ズーフ・ハルマ』が完成したのち、原書を翻訳するさいに、座右においた辞書は『ズーフ・ハルマ』である。当時、おもな蘭和辞書として、寛政8(1796)年成稿の蘭和辞書『波留麻和解』、文政5(1822)年に発行された『バスタールド辞書』(Bastaardt)、天保4(1833)年完成の『ズーフ・ハルマ』といった辞書があった。

『バスタールド辞書』は、中津藩第5代藩主奥平昌高の命により藩医の大江春塘が編纂したものである。いわゆる中津バスタードは、オランダ人医師メイエル(L. Meijers)が著した『語の宝』(Woordenschat)全3巻の第1巻の『外来語辞典』(Bastaardt-Woorden)を原本とする。中津藩は、前野良沢以来、蘭学の伝統があり、第5代藩主奥平昌高の時代に蘭学の全盛期をむかえる。奥平昌高は、文政5(1822)年に2冊からなり、7249語を収録するこの辞書を刊行する。

『ズーフ・ハルマ』は、長崎のオランダ商館長ヘンドリック・ドーフ(Hendrik Doeff)が中山得十郎、吉雄権之助など11名の通詞の協力により文化9(1812)年に編纂をはじめ、天保4(1833)年に完成した蘭和辞書である。ドーフは、寛政11(1799)年に長崎出島の商館に着任し、享和3(1803)に商館長に昇任し、文化14(1817)年まで在勤する。ドーフは、日常的にオランダ通詞と面談し、「日本の通詞が話すオランダ語は全くひどいもので、翻訳でも多くの言葉を完全に間違った意味にとっている」ことに懸念をいただき、「日蘭両国語の対訳辞書」の編纂に着手する<sup>73)</sup>。『ズーフ・ハルマ』は、フランス人ハルマの『蘭仏辞典』1729年第2版にもとづき編纂したものであり、5万語を収録する。稲村三伯が編纂した『波留麻和解』が『江戸ハルマ』と呼ばれるのにたいし、『長崎ハルマ』と呼ばれる。ドーフの日本名「道富」にちなみ、『道訳ハルマ』とも呼ばれる。『ズーフ・ハルマ』は、のちに幕府医官の桂川甫周によって改訂され、前編は安政2(1855)年、後編は安政5(1858)年に摺筆し、『和蘭字彙』として江戸で板行される。『和蘭字彙』は、江戸時代最大の蘭日辞書である。

玄随が原書の訳述の過程において『蘭訳弁髦』や『西洋医言』といった文典や用語集を編



纂したように、玄真も、『<sup>けんろく</sup>撿籠韻府』と『<sup>けんろく</sup>続撿籠韻府』を編集する。韻府は辞書を意味し、「撿」は「検」、しらべること、「籠」は小箱を意味する。玄真は、同僚の馬場佐十郎の教えをうけながら、ハルマの『蘭仏辞典』に記載された例文を訳出し、掲載する<sup>74)</sup>。『波留麻和解』が単語だけを列挙するのにたいし、『<sup>けんろく</sup>撿籠韻府』は実践的な翻訳の手引として作成される。続編の『<sup>けんろく</sup>続撿籠韻府』は、単語だけの対訳辞典である。

玄真は、蘭学塾の風雲堂の塾主として塾生の教育にあたる。玄真は、「<sup>しん</sup>登門者前後數百人<sup>75)</sup>」といわれる門人をそだてる。文政8(1825)年7月、玄真は美濃大垣藩医江沢養樹の長男榕を養子にむかえる。榕は14歳であった。養樹は、玄隨の代から玄真の代にいたるまでの門人であり、榕にとって宇田川家は師家にあたる。榕は、玄真の修学方針にしたがい、医学の基礎をまなびはじめる。

讀素靈之書受傷寒金匱之說能條保菴保菴槐園先生之弟子相州人受多識之學井岡櫻仙櫻仙名冽字元泉藩之侍醫通經義精本草受斯文之業葛山松下翁<sup>76)</sup>

玄真は、榕のためにみずから『素問』、『<sup>しん</sup>靈樞』などの漢方医書を講じる。さらに、玄隨の門弟であった漢方医能条保菴のもとで『<sup>しん</sup>傷寒論』、『<sup>しん</sup>金匱要略』といった漢方医書を、もと和泉藩侍医の井岡桜仙のもとで本草学を、幕臣の儒者葛山松下(松下葵岡)のもとで儒学をまなばせる。玄真は、漢学や漢方医学を西洋医学の基礎課程と位置づけ、若い榕だけではなく、門人にたいしても、まず基礎課程を徹底的にまなぶようもとめる。

玄真は、文政11年3月にオランダ商館長ドゥーフが上府したさいに、日本橋本石町の長崎屋へ榕を随行する。しかし、榕が「<sup>しん</sup>象胥之学」、すなわちオランダ語の翻訳法をまなびたいとつたえたときにも、「<sup>しん</sup>翻譯則終身之大業也」として、なお漢学をまなぶように命じる<sup>77)</sup>。

先是欲修象胥之学，先人不<sup>し</sup>許曰，家學漢土文章為<sup>し</sup>主，不<sup>し</sup>成則家学亦不<sup>し</sup>能<sup>し</sup>成

西洋医学は、漢学を基礎とする。漢学の素養がなければ、西洋医学は成就しない。しかし、榕はやがて玄真の命により、馬場佐十郎のもとで「<sup>しん</sup>譯文之法」をまなび、翌年以降、佐十郎に「西洋文法」をまなんだり、食客の吉雄俊蔵からも『<sup>しん</sup>六格前篇』をまなんだりするようになる。

風雲堂における西洋医学の、いわゆる専門課程については、門人諏訪俊がしるした『<sup>しん</sup>医範提綱』の「<sup>しん</sup>題言」からうかがいしることができる<sup>78)</sup>。

凡<sup>し</sup>ソ門ニ入り業ヲ受ル者ニハ先始メニ提綱ヲ授テ内景ノ梗槩ヲ示シ。又其問ヲ起シ益ヲ請ヲ待テ餘義ヲ演ベ。要旨ヲ發シ諄諄トシテ<sup>オシエ</sup>誨<sup>ウマ</sup>テ倦ズ。漸ク人身ノ<sup>オホム子</sup>機關ニ通ジテ一切ノ<sup>サト</sup>方法技術モ皆此ヨリ出ルト云ノ大畧ヲ<sup>カラクリ</sup>喻ラシム既ニ大義ニ通ズレバ。次第ニ<sup>ミチスジ</sup>誘導シテ本篇<sup>サカノホ</sup>醫範ノ精説ヲ<sup>ミチビキ</sup>講ジ畢ニ<sup>ツヒ</sup>天造ノ<sup>ゴクイ</sup>實際ヲ窺ヒ。精微ノ<sup>オクフカキ</sup>壺奥ニ<sup>グアヒ</sup>遡リテ治療ノ<sup>グアヒ</sup>機柄ヲ握ラシム

入門者には、はじめに『<sup>しん</sup>医範提綱』を講義し、人体構造の全体像をしめす。質問があれば、

それに回答する。要旨を述べ、繰り返し丹念におしえる。人体の仕組みを理解させたくて、人体の仕組みに応じて治療にあたることを把握させる。概略を理解すれば、『医範提綱』の各論を講じ、人体の実的な機能をしらべ、病因をあきらかにしたうえで具体的な治療法を選択させる。

玄真は、榕庵を養子にむかえた半年ほどのちの文政9(1826)年1月、風雲堂を榕庵にゆだね、深川万年橋の近くに隠居する。玄真にしたがい、信道も深川にうつる。玄真は、天保3(1832)年2月に津山藩から「退隠之許可」がおり<sup>79)</sup>、家督を養嗣の榕庵にゆずる。天保5年12月に病没するまで蘭書の翻訳に専念する。

玄真については、「宇田川老人は著書を以て、天下の医者を導く了簡にて、一向療治も教授せず」<sup>80)</sup>といった同時代の蘭学者の評価がある。臨床医としてではなく、オランダ語の読解力を身につけた翻訳家として評価されていた。玄真が、西洋医学が普及浸透していない時期には、みずから臨床医としてひとりひとりの患者を治療するよりは、訳著をとおし西洋医学の治療法を身につけた医者がひろく治療にあたるほうが効果的であると考え、訳業に専念したことがわかれる。玄真は、「江戸での翻訳西洋医学の本流」として、幾多の訳業をとおし、また優秀な門人を養成することによって、「近代医学の基礎」をきずきあげる<sup>81)</sup>。

### 三 宇田川玄真門生

坪井信道が宇田川玄真の家塾風雲堂に入門したのは、玄真が52歳になった文政3(1806)年のことである。信道は、すでに26歳になっていた。信道は、オランダ語の習得に専念し、未明から夜五ツの門限まで風雲堂で過ごすこともあった。風雲堂では、すでに文法書にもとづきオランダ語を学習することになっていた。玄随以来、『蘭訳弁髦』、『檢籠韻府』といった文法書や文典が編集され、文法に関する知識が蓄積されていた。信道は、中野柳圃の『助詞考』や馬場佐十郎の『和蘭文範摘要』などを書写し、実務にたずさわる長崎通詞が編集した文法書をまなんだであろう。

風雲堂では、『西洋医言』、『続檢籠韻府』といった用語集や対訳辞典が活用されていただけでなく、長崎ハルマや江戸ハルマといった蘭和大辞書も架蔵されていた。信道は、南葛飾郡平井村の燈明寺に寄寓し、毎日、鍛冶屋橋の津山藩邸内の風雲堂までの2里半の道のかよっていたが、文政4年3月には内塾生として玄真の居宅にむかえられ、「榛齋先生異常ノ厚意ニ由テ飢渴ニモ及ハス」<sup>82)</sup>、風雲堂の玄関番をつとめながら勉学にはげむ。

赤貧の信道は、「他人ノ為メニ傭書スル所甚タ多シ」<sup>83)</sup>。たとえば、毎晩、『ゾーフ・ハルマ』を借覧し、3部筆写し、2部は売りはらい、1部は自分の学習用につかう。当時、1部の筆工料は7両2歩であった<sup>84)</sup>。筆写の仕事は生活費を補填するためであったが、それ以上に信道の語学力の向上に役立ったはずである。緒方洪庵門下の福沢諭吉がゾーフ・ハルマを書写

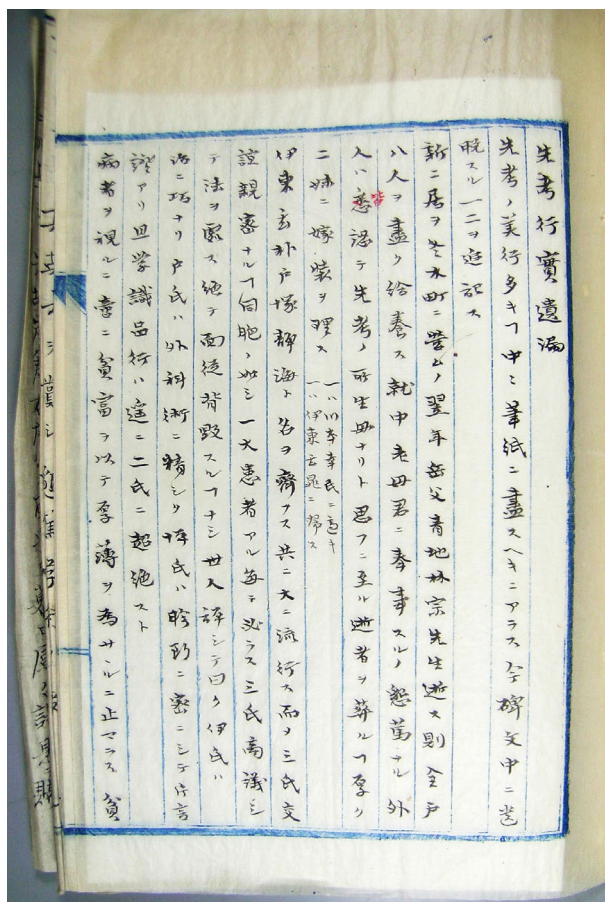


図4 「先考行實遺漏」

し、「蘭學書生に限る特色の商賣」にはげんでいた<sup>85)</sup>ことが想起される。

信道は、「紅毛学オ一」の玄真のもとで、着実にオランダ語の読解力を身につけ、やがて原書の訳述にもたずさわる。『西洋学家訳述目録』によれば、信道の訳著はつぎのとおりである<sup>86)</sup>。

精煉炭蒙	二冊
遠西二十四方	二冊
歇氏神經熱論	一冊
治法総論	一冊
萬病治準	二十冊
醫則	若干冊

このほか、『診候大概』、『内病論』などの訳著がある。『内病論』<sup>87)</sup>は、後述の『診断治療

箴言』の内科学に関する部分を抄訳したものである。「譯述編輯未タ稿ヲ脱セサルモノ者頗ル多シ」といわれる。しかし、「上木スルモノナシ」といわれる。信道は、遍歴時代から詩文をこのんでいたが、「詩文遺稿一冊」ものこす。

入門後3年を経た文政6(1823)年には、信道は玄真のすすめにより『ブールハーフェ箴言註解』(Verklaaring der korte stellingen van Herman Boerhaave; Over de kennis en geneezing der ziekten)の翻訳に着手する。ブールハーフェ(Herman Boerhaave)は、「当代全ヨーロッパの師表」として崇敬される18世紀のオランダを代表する内科学者である。1701年から1738年までライデン大学で医学を講じ、「詳しい病歴の聴取、正確な現<sup>スタートゥス・プレゼンス</sup>症の記述と分析、診断、治療法の設定、予後の判定、という近代診療の定石的な輪郭」をつくりあげる。画期的な臨床医学をまなぶために、ヨーロッパ全土からブールハーフェのもとに蝟集する。ライデン大学は、「十八世紀前半における西洋医学のメッカ」となる<sup>88)</sup>。

ブールハーフェは、「古代ギリシア医学を祖とするそれまでの古い医学と当時新科学として発達しはじめた解剖学・生理学・顕微鏡学の知識をよく系統立てられた一つの新しいシステムとして融合させた」医学の体系家、同時に「生理・病理過程を説明するために単純な機械論的原理を医学へ応用する方法論を確立した」理論家としての側面をあわせもつ<sup>89)</sup>。機械論は、「人間の身体は一つの機械である」という考えかたである<sup>90)</sup>。ブールハーフェは、「成立しつつあった新科学の成果を自らの病理学理論の中に積極的に取り込み、生理や病気の概念を単純な機械論的法則で説明しようとした<sup>91)</sup>。

ブールハーフェは、『医学指針』(Institutiones medicae)と『診断治療箴言』(Aphorismi de cognoscendis et curandis morbis)というふたつの代表的な著書をのこす。『医学指針』は、1708年に刊行される。当時のヨーロッパの大学における医学教育の伝統的な分類にしたがい、生理学、病理学、症候学、衛生学、治療学の5分野に関する簡潔な定説をしるしたものである。そのうち生理学が「分量にしておよそ三分の二弱」を占める<sup>92)</sup>。ブールハーフェは、『医学指針』の記述をおぎなうために、翌1709年に『診断治療箴言』を刊行する。『診断治療箴言』は、「内科と外科の両分野を扱い、各疾病あるいは各創傷ごとにその定義、原因、病気が悪化した場合の結果および治療法を総合的に論じている医学書」である<sup>93)</sup>。

『診断治療箴言』は、『医学指針』と同様に講義テキストとしてつかわれる。講義のさいには詳細な解説をくわえられたであろうが、簡潔な箴言がしるされているだけである。ブールハーフェの没後、高弟スヴィーテン(Gerard van Swieten)は、師の講義筆記の箴言に註解をほどこし<sup>94)</sup>、1741年から1772年にかけて、『ヘルマン・ブールハーフェの疾病の診断および治療に関する箴言』(Commentaria in Hermanni Boerhaave aphorismos de cognoscendis et curandis morbis)<sup>95)</sup>として刊行する。ブールハーフェの著作は、19世紀中葉にもヨーロッパ医学の中心であるパリでも、「なおりっぱにその生命を保っていた<sup>96)</sup>。

スヴィーテンは、1745年にオーストリア君主・神聖ローマ皇帝妃のマリア・テレジア (Maria Theresia) に招請され、侍医兼図書館長としてウィーンにおもむく。のちにウィーン大学医学部の改革にあたり、古ウィーン学派 (die ältere Wiener Schule) をひきい、「新しい医学の中心」として蘇生させる。

『診断治療箴言』原著は、1479章の箴言からなり、すべてラテン語でしるされる。第1章から第20章までが序論、第21章から第144章までが身体の固体部分と液体部分の相互作用を基本とする病理論、第145章から第557章が外科、第558章から第620章までが熱病論総説、第621章から第769章までがさまざまな熱の症状、第770章から第874章までが脳炎、肺炎などの激しい熱をともなう疾病について論じる<sup>97)</sup>。プールハーヴェの病理論は、「病気の現象を機能の方面から研究する」病理生理学 (『広辞苑』) にほかならない。

信道は、文政8 (1825)年あるいは翌9年に『診断治療箴言』を訳了し<sup>98)</sup>、『万病治準』となづける。信道が翻訳したのは、原著の序論と病理論の全部、熱病論の中核である第558章から第718章までにあたる部分である。金沢市立玉川図書館近世史料館の蒼龍館文庫には、『万病治準』20巻の写本がおさめられている<sup>99)</sup>。蒼龍館文庫本の最終巻末尾には、「天保十二年佐渡三良謄写於龍門楼上」という筆写者の奥書がみられる。佐渡三良は、信道の長女牧の入り婿になった佐渡良益、のちの坪井信良の実兄である。信道は、天保11 (1840)年ころに『万病治準』の訳稿を京都の小石元瑞におくる。蒼龍館文庫本は、元瑞の家塾龍門楼の塾生であった三良が筆写したものである。

当時、刊本には、通例、序、例言、題言が付され、筆写するばあいにも、それらが書き写される。信道が稿本にそれらを付さなかったためか、蒼龍館文庫本には序や例言が欠落し、訳述の経緯、原著などに関する詳細はわからない。表紙をめくれば、本文になる。

各章ごとに、まずプールハーヴェの簡潔な箴言が提示され、「斯微旬曰ク」としてスヴィーテンの詳細な解説がくわえられる。信道が訳述した『万病治準』第1章では、プールハーヴェの箴言は1行にすぎないが、スヴィーテンの解説は200行にわたる。解説の内容は、プールハーヴェが講義で説明したり、スヴィーテンに説明したものである。

『万病治準』の第1章の冒頭では、疾病に関するプールハーヴェの箴言が提示される。

人身之三機、謂<sub>レ</sub>活機、性機、神機、一有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>妨碍、是之謂<sub>レ</sub>疾病、

人身には、活機、性機、神機という3機があり、ひとつでも損なわれれば、疾病という。活機は「生命の機能」(levendige werkingen)、性機は「消化の機能」(natuurlijke werkingen)、神機は「魂の機能」(dierlijke werkingen)である<sup>100)</sup>。箴言の直後にスヴィーテンの解説がつく。まず、「活機」は「コレ有<sub>レ</sub>ハ性命則チ存シコレ無<sub>レ</sub>ケレハ則チ亡フル者」である。以下、つぎのようにつづく。

凝流二体少シモ缺損スル所口無ク唯血ノ運行休止スルノミナリ故ニ術ヲ施メ再ヒ其運行

ヲ催発スル寸ハ忽チ蘊ス是レ活機故ニ後スルヲ以テナリ故ニ活機ハ血ノ運行ニ在リト知  
ルヘシ

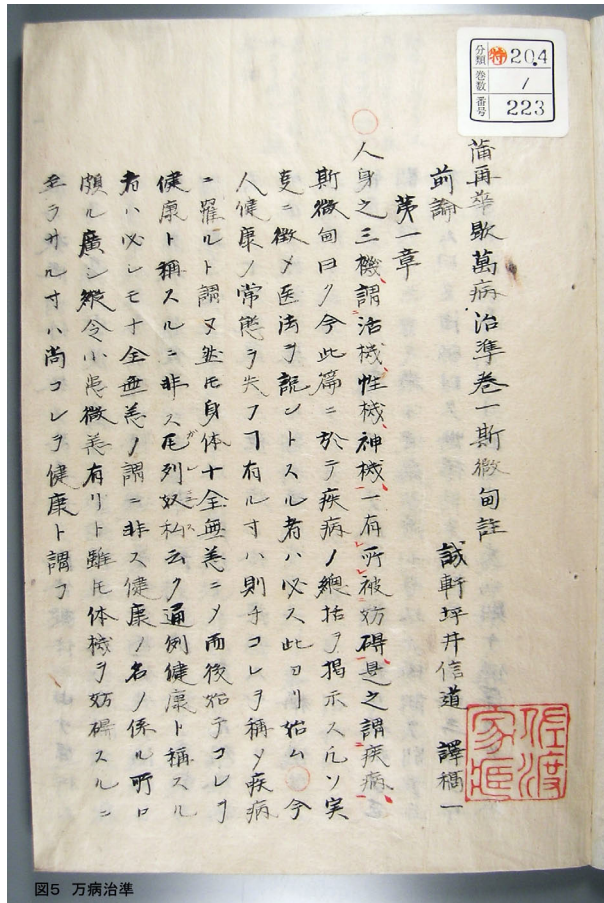


図5 万病治準

図5 『万病治準』

凝体，すなわち身体の固体部分と流体，すなわち身体の液体部分とに異常がなく，血流がとまるばあいには，施術することにより血流をうながせば，ただちに蘇生する。「活機」は，血液循環により保全される。プールハーフェは，血液循環を生命の基本的なメカニズムとみなす。第1章には，つぎのような記述がみられる。

○右ノ所説ニ就テ之ヲ観ル寸ハ性命ノ存スル門ニ血ノ運行ニ○在リ。故ニ一分ノ性命ト虽ト必ス心ノ運動ニ倚頼スル門知ル可キナリ。然ト心ノ能ク孜孜トノ運動スル門ヲ得ル所以ハ，其諸筋ノ機轉ト静脈ノ血ノ心室ニ射入スルト，心室ノ血ノ支障セラル、所口無ク，能ク動脈ニ洩出スルトニ由ル。

「血ノ運行ニ○在リ」の○印の部分については、欄外に「由ル門昭昭タリ。血ノ運行ノ起原ハ心ノ運動ニ」という書き込みがある。生命をつかさどる機能が血液循環にあるという機械論者の考え方をみてとることができる。

つぎに、「性機」は「人身ニ於テ日夜常々トノ消耗スル所ノ者ヲ絶ヘズ補充スルノ機能」である。以下、つぎのようにつづく。

人身ノ諸物ハ生氣ノ運営ニ由テ日夜自ラ消耗ス故ニ飲食スル所ノ物ヲ以テ随テ之ヲ營養シ新陳相交代ノ能ク一身ヲ保持スルヲ得

栄養の摂取と代謝により諸器官はたゆまず更新され、生命が保持される。血液が循環することにより、生体の諸器官は栄養分を摂取し、それぞれ生理的なはたらきをいとなむ。

さいごに、「神機」は「活体ニ於テ諸器ノ變動ニ由テ神識忽チ諸々ノ変物ヲ思ヒ或ハ神識先ツ思フ所口有テ次テ体中ノ諸器ヲ變動スル者共」である。脳で生成される神経波が体中の諸器官につたえられ、諸器官を収縮させる

玄真が信道に『診断治療箴言』を翻訳するようすすめたのは、西洋医学の知見と技術を臨床に応用したいという信道の意思をくんだからである。信道は、『診断治療箴言』の生理学に関する部分を中心に翻訳する。もっとも「原生」、すなわち生理学という概念がなかったために、信道には臨床医学を翻訳したという意識しかなかった。日本で最初の生理学書である『医原枢要』が高野長英によって編訳・板行されたのは、10年ほどのちの天保3(1832)年のことである。長英は、『医原枢要』の題言に「つぎのようにしるす<sup>101)</sup>。

西醫ノ道、一ニ人身ヲ覈明スルヲ以テ本トナス。故ニ此ニ従事スル者ニハ、幼ヨリ内景ノ諸書ヲ授ケ、熟讀セシムル久シテ、漸ク人身諸器ノ製造、諸臟ノ位置、諸部ノ關係スル所ニ通ズルヲ俟テ、人身窮理ノ書ヲ讀シメ、人體ノ形質、諸器ノ主用ヲ詳ニシ、活器、運動營為シテ、性命存活スル所以ヲ明ニセシム。

天保3(1832)年12月に安懷堂入門後1年半あまりたった緒方洪庵がドイツ人内科医ローゼ(Theodor Georg August Roose)原著の『人体物理学便覧』(Handboek der natuurkunde van den mensch)を訳出したのは、信道のすすめによる。

信道は、洪庵が弘化5(1848)年春に『病学通論』を翻訳・板行するさい、序に「つぎのようにしるす<sup>102)</sup>。

自享保中始允讀洋書、於今百有餘年。賢豪輩出。其鑿書經譯者、不下數十百種。然解體新書、鑿範提綱之外、大抵方藥書、而及原生原病之學者、未嘗聞之。豈非由學者欲速成哉。蓋西醫之道、以明人身内景為本。原生原病次之。而後藥劑治方從之。譬諸構室、内景礎也、原生原病柱也、藥劑治方樓屋也。今也礎而未柱、遽然架屋、無此理也。我榛齋先生有見於此。使緒方公裁、青木周弼譯原病書數部、欲以折哀衆說、歸諸簡明也。凶幾先生捐館。遺命公裁、繼其志。

公裁乃游<sub>二</sub>長崎<sub>一</sub>，親接<sub>二</sub>蘭客<sub>一</sub>，反覆質疑。再取<sub>二</sub>原書<sub>一</sub>，而鑽<sub>二</sub>研之<sub>一</sub>，又參<sub>二</sub>考諸書<sub>一</sub>，苦心焦思。十換<sub>二</sub>裘葛<sub>一</sub>，更<sub>レ</sub>稿者七八，今春始克成<sub>レ</sub>編，將<sub>二</sub>上木伝<sub>一</sub>世。

享保年間（1716～1736）に、蘭書の翻訳がはじまり、すでに100年あまりの歳月がすぎた。その間、賢豪が続出し、医書の翻訳は100種以上にたった。しかし、『解体新書』や『医範提綱』のほかは、おおむね薬書であり、病理学書を翻訳したものはいない。それは、学者が速成をもとめるためであろう。西洋医学は、人体の内部構造をあきらかにすることを基本とする。病理学がそれにつき、薬剤治法はさらにそれにつぐものである。建物にたとえれば、人体の内部構造が礎石であり、生理学（原生）と病理学（原病）が支柱であり、薬剤治法が屋根である。現在は基礎の段階であり、いまだに支柱もたっていない。突然に屋根をかけるのは理にかなわないことである。榛齋先生は、おもうところがあり、緒方洪庵と青木周弼に病理学書を翻訳させ、衆説と折衷し、簡明な手引き書を作成させようとした。ほどなく先生は長逝するが、洪庵に遺言し、志をつがせた。洪庵は、長崎にあそび、オランダ人に接触し、質疑をくりかえす。ふたたび原書をひもとき、研鑽し、また諸書を参考し、苦心焦思する。10年の歳月をついやし、7、8回も稿をあらため、今春脱稿し、まさに上梓し、公にする。

信道がすでに解剖学、病理学、生理学といった基礎科学から臨床医学にいたる学課課程を明確に意識していたことが窺われる。それは、19世紀中葉以降、基礎科学の成果を吸収することによって、病院医学から研究室医学へと転換し、急成長したドイツ医学<sup>103)</sup>の学課課程に相応するものである。信道は、嘉永元(1848)年、すなわち19世紀前半に没する。19世紀中葉以降のヨーロッパにおける医学の動向を知るよしもない。プールハーフェは、「古風な体系家たちの時代からようやく科学者たちの時代に移ろうとするこの過渡期の巨匠」<sup>104)</sup>として信道にも来るべき新しい時代を予見させる。信道は、『診断治療箴言』の翻訳により、新しい時代を切り拓こうというライデン学派の臨床医学を幕末日本にとりいれようとした。

信道は、玄真にしたがい、深川の隠居先にうつる。玄真の隠居先には、そのほかに数名の外塾生がかよってきていたのであろう。坪井塾生であった青木周弼と緒方洪庵が信道のすすめにより最晩年の玄真の教えをうけるために深川にかよったこともある。信道は、文政11(1828)年春にも、「不<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>替<sub>レ</sub>ブル読<sub>レ</sub>罷<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>」<sup>105)</sup>、さらに「塾中にてハ新渡神経熱之書、隔朝会読仕<sub>レ</sub>これも翻訳ハ小生仕<sub>レ</sub>候」としている<sup>105)</sup>ところからも窺い知れるが、プールハーフェの著作を翻訳しつづけていた。信道が「新渡神経熱之書」を翻訳しようとしたのは、文政5(1822)年に西日本一帯にコレラが流行したこととかかわりがあるであろう。

信道は、玄真の隠居先では「神経熱之書」を1日おきに会読し、翻訳に着手する。「神経熱之書」は、のちに『扶歇蘭土神経熱論』と名づけられるが、その原著は19世紀前期のドイツにおいて「もっとも名望の高かった医学者の一人」であるフーフェランド（Chrstoph Wilhelm



Hufeland)<sup>106)</sup> が1799年に刊行した『神経熱およびその合併症に関する所感』(Bemerkungen über das Nervenfieber und seine Komplikationen)である。フーフランドの原著は、「ニューマン」(A. Numan)によりオランダ語に翻訳され、同名のオランダ語版(Waarnemingen omtrent de zenuwkoorts en derzelver komplikation)として1808年にフローニンゲンで刊行される<sup>107)</sup>。信道は、天保4(1833)年、『扶歇蘭土神経熱論』写本5冊を訳了する。『扶歇蘭土神経熱論』には、「神経熱」についてつぎのようにしるされ<sup>108)</sup>。

一千八百六年ノ秋ヨリ一千八百七年ノ春ニ至ルマテ獨乙都蘭土ノ北邊戦争流乱セシ諸地ニ於テ悪性ニモ傳染シ易キ神経熱流行セリ此病従古軍役ノ常病ニモ古人是レヲ疫トシ又中コロ此ヲ言テ腐敗熱トシ後遂ニ改メテ神経熱トス

此症啻ニ他ノ熱症ニ由テ卒然トメ誘発セラル、ノミナラス、其受病ノ始メヨリ一般不ニノ起原アリテ発作スル者ノ如ク相混結メ此ヲ患フル者アリ、然レ亦能ク定メテ其神圣ニ関涉スル一個ノ傍症ナルヲ知ル可キナリ

「神経熱」は、突然に熱症により誘発されるだけでなく、発症したときには一般の熱病の症状とかわらないが、神経を冒す。「神経熱」とは、おもい神経障害をとまなう腸チフスの俗称である。腸チフスの初期には、発熱、悪寒、頭痛、倦怠などの症状がみられるが、1週間もすれば、熱があがりはじめ、恍惚、昏迷、譫妄が生じる。臨床医信道は、流行病にも関心をよせていた。安政5(1858)年にコレラが大流行したとき、信道門下の緒方洪庵が『虎狼痢治準』を訳述したことが想起される。

早稲田大学図書館に所蔵される『扶歇蘭土神経熱論』の奥書には、つぎのようにしるされる<sup>109)</sup>。

于時天保九年戊戌年晩秋

江府深川冬木街河岸於

安懷堂北塾謄寫之終

橐吾城 侍醫 山本義敬藏書

坪井塾生の山本義敬は、天保9(1838)年晩秋に安懷堂に架蔵される信道の訳稿を筆写する。信道のふたつの塾では、信道の訳稿は筆写され、テキストとしてつかわれていたのであろう。

信道は、文政9(1826)年12月には『診候大概』を脱稿する。『診候大概』は、西洋医学の内科診断学書である。吉雄耕牛が文化12(1815)年に『因液発備』を、大垣藩医の江馬蘭斎が翌文化13年に『五液診法』を板行するが、信道の『診候大概』は「診断学ノ著述ハ坪井誠軒ノ診候大概ヲ以テ嚆矢トスベシ」<sup>110)</sup>といわれる。『新撰洋学年表』も『診候大概』について「洋方診断書の第一書也」と評する<sup>111)</sup>。

診候とは、現代医学用語では診断を意味し、江戸期には診病、診方、察病などとも表記される。緒方洪庵は、『扶氏経験遺訓』では“Diagnosis”を「看方」と訳す。信道は、『診候大



舌黄、舌黒、腹の虚弱、腹の堅満について問診する。しかし、その病因について熟思することはない。それは診断とはいえない。それにもかかわらず、その病気を治療しようとしても、それは至難の業というしかない。それは、方位を知らないまま航海に出るようなものであり、目標も知れない。たとえ病気が幸いに治癒したとしても、医者が病気を治療したとはいえない。それは、実学者が実践すべきものではない。いま、この冊子がしるすのは、その大略だけである。大略だとはいえ、それにしたいが、専念刻苦し、おおくの症例を経験すれば、過失が少なくなることを切望する。

本文は、「診候本旨第一」、「流体第二」、「凝体第三」、「別男女第四」、「問年第五」、「視形第六」、「診脈第七」、「候胸腹第八」、「診舌第九」、「験冷熱第十」、「候神識第十一」、「問飲食第十二」、「問寤寐第十三」、「検溺第十四」、「検尿第十五」、「問所曾患之病第十六」、「問平日之動止第十七」の17項目からなる<sup>114)</sup>。『因液発備』や『五液診法』が「おもに小便の清濁、分量、臭、味、色、沈渣等を始め排泄物の化学的検査の方法を叙述せる」<sup>115)</sup>のたいし、『診候大概』はさらに可能なかぎり方法をつくし、診断をくさず道筋を提示する。

「診候本旨第一」は、疾病について定義したうえで、診断の要諦をしめす。

人之身別之、則凝流兩部。人之病別之、則凝流兩部之病。病也者、変常之謂也。故医診疾病者診凝流兩部之變也。

人身は、凝体と流体からなる。ひとの病は、凝体と流体の病である。疾病は、常態の変化により生じる。したがって、医者が疾病を診察するのは、凝体と流体の変化をみるということである。

「流体第二」は、「流体」と疾病の関連に言及する。

凡人身中、流動者、謂之流体。血及諸液是也。流体資原於飲食、凝体基根於流体。故飲食絶、流体涸、凝体削。

人身のなかを流動するものを流体という。血液と諸液が流体である。流体は、飲食することにより形成され、凝体は流体によりなりたつ。したがって、飲食をたてば、流体は涸れ、凝体は衰弱する。

「凝体第三」は、「凝体」の成分について述べる。

凡人身之形器、肉、骨、筋膜等、共謂之凝体。是人身之所立成。若欠其一、則無以成形軀。細檢其原質、蓋本一般土粉耳。日夜由飲食、駕流体入諸脈。兩々相比、三々相統。以成長形纖維。纖維復無数相会、以成形器。

人身の形器、肉、骨、筋膜などを凝体という。これらは人身をなりたせるものである。どれかが欠ければ、形軀をかたちづくることはない。微細にわたり検査すれば、凝体は「原質」、すなわち分割できない原子からなり、土粉にすぎない。飲食により、流体となり、諸脈にはいる。それらが繊維を形成し、繊維がまとまり、形器を形成する。

「凝体第三」では、総論的に診断のための手順についても言及される。

凡欲診凝流二者者，当須別男女，問年，視形，診脈，候胸腹，診舌，驗冷熱，候神識，問飲食，問寤寐，檢溺，檢屎，問曾患之病，問平日之動止。

凝体と流体を診るばあいには、男女をわけ、年齢を問い、人身の表面を観察し、脈をとり、胸や腹を触診し、舌を診、意識をうかがい、飲食について問い、睡眠について問い、尿を検査し、大便を検査し、既往症について問い、日常生活について問わなければならない。

診断にさいし、男女を区別するのは、男女は生活様式がことなるだけでなく、諸臓器や諸液もことなり、疾病やその治療法がことなるからである（「別男女第四」）。患者の年齢を問うのは、年齢により凝体と流体に変化が生じ、生体に変化するからである（「問年第五」）。患者の身体のあらゆる部分を視診したり（「視形第六」）、脈拍をはかたり（「診脈第七」）、胸や腹を触診したり（「候胸腹第八」）、「於身体内部之中、可以日直視之処、止於舌与口之裡面」、すなわち身体内部のなかで目で直視できる舌と口を観察したり（「診舌第九」）、あらゆる方法で患者の病態をさぐったうえで、診断をくださなければならぬ。

「驗冷熱第十」には、ブルハーフェの計測的方法論が端的にあらわれている。

身冷者，血行不及之徴。身熱者，血行過度之徴。熱者，火氣之衆也。冷者，火氣之散也。  
（中略）外部之冷熱，以的兒没咩的兒（驗冷熱器之名）可測之。内部之冷熱，以患者所覺与尿色知之。

体温がひくいのは、血行がわるいからである。熱があるのは、血液循環が過度になっているからである。（中略）外部の冷熱は、「<sup>テルモメーター</sup>的兒没咩的兒」により測る。内部の冷熱は、患者の自覚症状と尿の色により判断しなければならない。「驗冷熱器」、すなわち体温計は『万病治準』第563章にみられる。ちなみに、ドイツ人医学者ヴンダーリッヒ（Carl Reinhold August Wunderlich）が「病気における体温の動き」（Das Verhalten in Eigenwaerme in Krankheiten）を発表し、患者の体温測定をルーティン化したのは、1871年のことである<sup>116)</sup>。

『診候大概』は、『因液発備』や『五液診法』とはことなり、たんなる翻訳書ではなく、『<sup>ブルハーヘ</sup>蒲爾花歇，万病治準』の訳了後、その全巻をよく消化、吸収した上で、その大意を縮めて成ったもの<sup>117)</sup>である。信道は、臨床医の養成についておもいめぐらせ、『診候大概』をあらわす。『診候大概』は、他の訳著と同様に、坪井塾においてテキストとしてつかわれることになる。

#### 四 病院兼医学校

信道は、風雲堂に入門してから10年たった文政12(1829)年、玄真から10両借りうけ、江戸深川上木場三好町のちいさな借家で開業する。西洋医学塾安懷堂もひらく。玄真がつけてくれた門人とふたりで汲み焚きするという生活であった。やがて患者もおおくなり、塾生もふ

えたために、天保3(1832)年には深川冬木町に家屋を新築し、日習堂をひらく。信道は新居にうつるが、安懷堂もそのままのこす。このときも、玄真から30両を借りうける。信道は、風雲堂や玄真の近居先でも、後進の指導にあっていたが、塾主として、はじめて塾生の指導にあたることになる。

信道は、そのころ、つぎのように述べている<sup>118)</sup>。

今日斯学之隆、豈唯止于此乎。予不揣庸劣夙從事于斯学、欲以下翻一訳西書、誘導蒙士、為生涯之任。

自分は、凡庸ではあるが、はやくから蘭学にとりくみ、蘭書を翻訳し、初学のを誘導することを生涯の使命としようと思決意する。信道が後進の育成に熱意をもっていたことがうかがわれる。

玄真門下で信道の3年後輩の箕作阮甫が編集した日本最初の医学雑誌である『泰西名医彙講』二輯によせた信道の序<sup>119)</sup>から、信道が想い描く医師像が窺い知れる。

凡病不待治、而自治者。十居八九。是庸醫之所以能立于世也。其必待治而後能治者。治之洵難矣。雖然非能治其難治。何足稱醫乎。是古今良醫之所以焦思苦心。以求其方瀆也歟。友人津山侍醫箕作庠西。嚮有<sub>二</sub>名醫彙講<sub>一</sub>之著。其爲<sub>レ</sub>著。集<sub>レ</sub>錄遠西名醫、能治<sup>スル</sup>難治之技倆工夫者也。夫遠西醫書之航<sub>二</sub>于我<sub>一</sub>東方者固多矣。而欲<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其起<sub>レ</sub>痾碎<sub>レ</sub>痼之良法奇術<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>讀<sub>二</sub>實驗書<sub>一</sub>焉。

病は、治療をほどこすことなく、ほとんどが自然に治癒する。そのために、藪医者に世にはばかる。治療をほどこすことによって治癒するというが、治療することは容易ではない。しかし、難治の病を治癒させることができなければ、医者自称することはできない。そのために、古今の良医が苦心し、思い悩み、治療法を探求する。阮甫があらわした『名医彙講』は、西洋の名医が難治の病を治療するために考案した技倆や工夫の事例を収録したものである。おおくの西洋医書が日本にも舶載されるが、難病治療の妙法を知ろうとすれば、おおくの症例に目をとおさなければならない。

坪井塾への入門を希望するものは、漢学をまなび、漢方医学の基礎を修得していなければならない。入門をゆるされれば、「束脩」金100疋、「扇子料」金50疋、「奥方」に金50疋、「塾頭」に金50疋、2人の「塾監」にそれぞれ「半紙二帖」、「同僚諸子」に「半紙二帖」、「僕」、すなわち下男に「銭二百文」をおさめる。1疋は10文に相当する。入門者は、そのほかに半年の授業料として盆暮れに「黒豆一升」をおさめるだけである<sup>120)</sup>。安懷堂の束脩は、伊東玄朴の象先堂の束脩の半額である。

塾に寝泊まりする内塾生は、「其ノ勞ヲ謝シ可<sub>レ</sub>申」ために「学半銭」として「毎月廿九日、鳥目二百孔ヅツ」、すなわち毎月200文づつおさめる。「塾師」は、そのなかから下男に「汲炊銭」として毎朝50文づつ手渡す。自炊する塾生のために火をおこし、水を汲む下男へのさ

さやかな慰労金である。「塾師」は、そのほかに受け持ちの塾生から毎日 2 銭を預かり置き、「給復銭」として半月ごとに師家におさめる。「給復銭」は、「塾舎、戸障、畳等破損修復」のためにつかわれる<sup>121)</sup>。部屋代のかわりに修理修繕費用が徴収される。極貧の書生時代をおくった信道は、塾生に金銭的な配慮をおこたらない。

塾生は、信道がさだめた塾則にしたがい、坪井塾生として生活をはじめ。坪井塾の塾則<sup>122)</sup>は、日常生活については、飲酒、外宿、金銭諸貨の貸借、俗謡淫楽拇戦等の雑戯を禁じ、門限の厳守をもとめる。塾生が塾則に違反したばあいには、「罪科ノ軽重ヲ論ゼズ」即刻退塾させられる。「新来之生」は、「塾例」により玄関取次をつとめる<sup>123)</sup>。

塾則は、日課についてもさだめる。第 1 に、「毎朝講積之節ハ兩塾不レ残出席可レ申事」、すなわち毎朝の信道による講積には、安懷堂と天保 3 (1832) 年に深川冬木町にひらいた日習堂の塾生とも出席しなければならない。講積を欠席したり中途退席することは禁じられる。第 2 に、「塾師会席ハ各々学問ノ浅深ニ随ヒ、何レノ会ニテモ相定メ」、会席を欠席したり中途退席することは禁じられる。塾生は、習熟度に応じ、いくつかのグループにわけられ、毎日、「所属之塾師」が主宰する「会席」に参加しなければならない。

以下、坪井塾の日常生活をながめてみよう。

暑寒ニ拘ラス毎朝未明ニ起キテ講積スル一ニ二時朝飯成ルヲ報スルヲ待チテ始メテ止ム其内遂々薬ヲ乞フ者アリ診ヲ求ムル者アリ依テ忽々ニ朝餐ヲ喫シ診察ヲ遂ケテ二人ノ代診者ニ向テ本日往診スヘキ家名ヲ記シ終テ忽ニ衣服ヲ改メ駕籠ニテ東西ニ疾駆シ諸家ヲ回診ス日々十里内外ニ當ル午飯ト晚餐トハ到ル所ノ病家ニテ之ヲ辨ス而メ夜半前後ニ及テ始メテ家ニ帰ル然レ氏大病人ノ急ニ往診ヲ請フ者又ハ代診人施治患者中不意ノ変体異状アルヲ報スルアレハ再ヒ出テ之ノ訪フ或ハ病者ヲ看待シテ<sup>ママ</sup>綴曉スルアリ終年連日此ノ如キヲ以テ常トシ偶身疾病アリテ在褥スル日ニ非サルヨリハ自宅ニテ三回ノ食事ヲ為スナシ<sup>124)</sup>

信道は、未明におき、毎日、朝食前に、起居する日習堂において講積をおこなう。安懷堂の塾生は、「講積」を聴くために日習堂までの 10 分足らずの道のりをかよい、「解剖・生理・薬物・病理・診断等の諸學」を聴く<sup>125)</sup>。

朝食のあいだにも、薬剤をもらいにくるものや診察をうけるものが訪れる。信道は、朝食をすませると、患者を診察治療し、代診を担当するふたりの塾生にその日の往診先をしるしたメモをわたす。それから、衣服をあらため、駕籠ででかける。昼食と夕食は病家ですませ、帰宅が夜半になる。急患があれば、帰宅後にふたたび往診にでかける。信道は、帰宅後、就寝までのわずかな時間を講積の準備、蘭書の翻訳、西洋医学の研究にあてる。

坪井信良先生の先考信道先生は、蘭学塾を開かれ、多くの子弟を教育された有名な蘭方医で、信良先生も亦医業を嗣いで塾を継承されて居たのである。当時の蘭学塾は何れも

塾主が自ら教へるのではなく、塾頭が<sup>しつか</sup>確りしてゐるかどうかで其塾の価値が定まるのであつた<sup>126)</sup>。

坪井塾をひきついだ信道の女婿信良は、塾内の教育・学習活動については、すべて塾頭にゆだねたようである。しかし、信道は、「講釈」を毎朝の日課としていただけでなく、おそらく3と8の日、すなわち3、8、13、18、23、28日に「臨床・病理総合討議会」あるいは「病床側授業」ともいふべき臨床授業をおこなう<sup>127)</sup>。それは、上級の塾生に「医按」を作成・提出させ、それに甲・乙・丙の評点を付し、返却するというものである。「医按」とは、特定の患者の性別、年齢、症例、病名、原因、予後、治法、撰生について塾生が自分の知識と文献にもとづき書きしるしたものである。「医按」を作成させるために、あらかじめ、みずから著述した「診候大概」をテキストとして、脈拍を数え、体温を測定し、患者の病状、診断、予後などについて討議させていたであらう。

信道が往診にでかけると、上級の塾生が代診にあたり、そのほかの塾生は学習にとりくむ。それは信良の時代にもかわらなかつたであらう<sup>128)</sup>。

皆塾頭並に其下に居る五、六人の先輩の塾生が他の者の手引をするので、塾室の彼方此方に一団をなしつつ、机を並べ、夜は各々種油のランプを<sup>とも</sup>点し鼻の孔を黒くして学んだ。

信道の深川冬木町の居宅は、信道の家族の居住空間、病院の空間、学校の空間からなる。病院の空間は、信道の書斎・寝室の左側の8畳の座敷と8畳の薬室であらう。薬室の床の間には薬箆がならんでいた<sup>129)</sup>。信道は、「病人の頼に思ふ所の者は医者なり、医者の頼む所は薬なり、薬剤もし差誤あるときは啻に患者を困苦せしむのみならず、動もすれば性命を奪うに至る」として、「薬室定則」をさだめる<sup>130)</sup>。冬木町の往来に面した8畳の前塾、裏庭の別棟の10畳の後塾と3畳の塾頭室、図7の中央部の「二階昇口」からのぼる2階の8畳と6畳の間が塾生の学習と生活のための空間である。

はじめて日本に中国の書物が舶載されたとき以来、漢学の教授・学習方法が工夫考案され、江戸後期には学統・学派や地域性をこえ、素読・講釈・会読・独看という段階的な教授・学習方法が整備される。漢学の教授・学習方法は、蘭学にも適用される。坪井塾の空間の随所に、「先輩の塾生」、すなわち塾師を中心にして机をならべる「一団」は、素読・講釈・会読の段階の塾生の学習グループである。

蘭学における素読の段階では、オランダ語を習得しなければならない。個別教授または個人学習の段階である。文義にふみこむことなく、オランダ語の基礎を身につける。アルファベット (alfabet)、発音をおぼえるところからはじまる。

従来の蘭学塾では、『蘭訳筈』(前野良沢)、『蘭学階梯』(大槻玄沢)といった江戸の蘭学者や、『蘭学生前父』(中野柳圃)、『和蘭文範摘要』(馬場佐十郎)、『重訂属文錦』(吉雄権之助)といった長崎通詞があらわした訳著が初学者のオランダ語学習のためのテキストとして

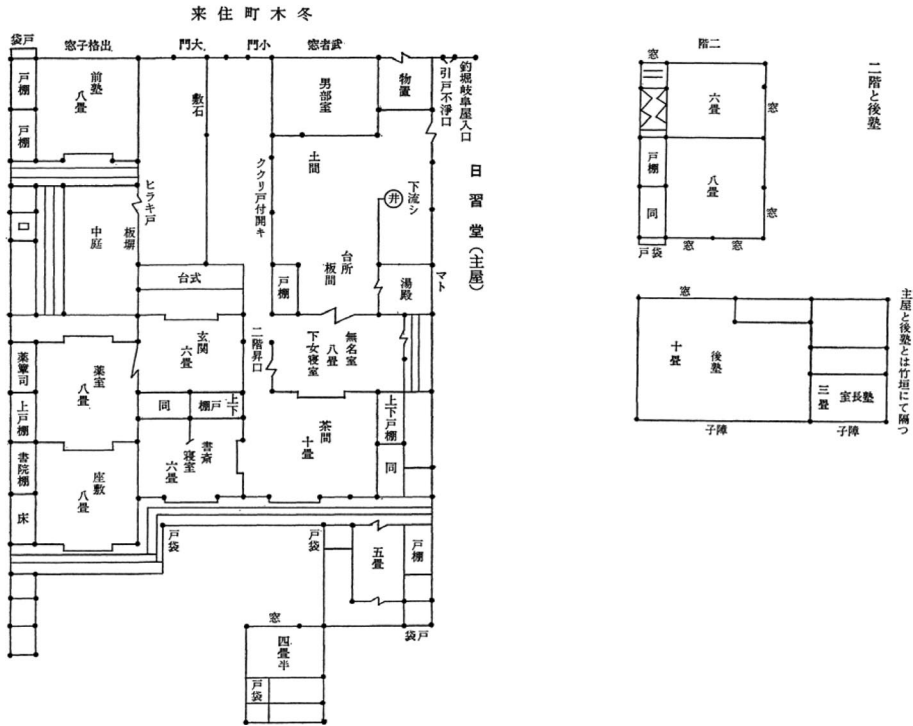


図7 日習堂邸図 (左: 母屋, 右: 二階・後塾)

つかわれていた。しかし、信道の時代にはウェーランド小文典とマートシカッペイ文法書が主流になる。天保期になると、原典によるオランダ語学習が顕著になるが、坪井信道はその中心的な存在である<sup>131)</sup>。

ウェーランド小文典は、オランダの言語学者ウェイランド (Pieter Weiland) があらわした文法書である。ウェイランドは、オランダ語の綴字法の確立にとりくみ、1805年には『オランダ語文法』(Nederduitsche Spraakkunst) と『オランダ語文法基礎』(Eerste Beginselen der Nederduitsche Spraakkunst) を出版する。1799年から1811年にかけて『オランダ語文法辞典』(Nederduitsch taalkundig Woordenboek) を刊行する。この辞書は、19世紀前半のオランダ語辞書の基準となる。ウェイランドは、その後も文法書や辞書を編纂する。それらも長崎に船載される。ウェイランド没後の1818年にドルトレヒトで出版された『学芸辞典あるいはあらゆる種類の外来語に関する解説』(Kunstwoordenboek, of verklaring van allerhande vreemde woorden) は、安政5 (1858)年に秋山義方により江戸で復刻刊行される。

マートシカッペイ文法書は、オランダのマートシカッペイ公益協会 (De maatschappij: tot Nut van't Algemeen) が刊行したオランダ語文法教科書である。日本に船載された『グランマチカ、あるいはオランダ語文法』(Grammatica, of Nederduitsche Spraakkunst) と『シン



タクス、あるいはオランダ語の語形成』(Syntaxis, of woordvoeging der Nederduitsche Taal)は、それぞれ「ガランマチカ」と「セインタキス」と呼ばれ、天保期以降、オランダ語学習の入門書としてひろく使用される。箕作阮甫は、マートシカッペイ文法書を翻刻し、天保13(1842)年に『和蘭文典』前編を、嘉永元(1848)年には『和蘭文典』後編を刊行する。前編は「ガランマチカ」と通称され、題簽には「和蘭文典前編」としるされる<sup>132)</sup>。天保13(1842)年に刊行される。全体は62丁、序言(Inleiding)と3章からなる。第1章は音韻・文字論(Over de letters en derzelve zamenvoeging tot lettergrepen en woorden)、第2章は品詞論(OVER DE ONDERSCHIEDENE TAAL OF REDEDEELEN)、第3章は綴字論(Over spelling)である。後編は「セインタキス」と通称され、題簽には『和蘭文典後編成句論』としるされ、嘉永元(1848)年に刊行される<sup>133)</sup>。全体は49丁、3章からなり、第1章は単語の結合

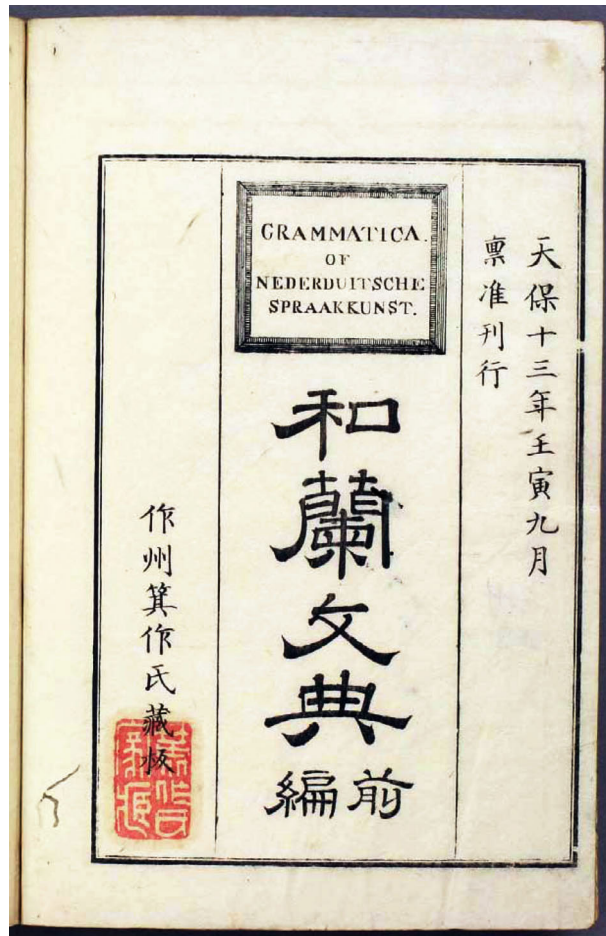


図8 『和蘭文典』前編

(Over de verbinding van enkele woorden), 第 2 章は句中における語の配列順序 (Over de orde, waarin de woorden in eene rede op elkander moeten volgen), 第 3 章は部句の集合と種類 (Over het zamenstel en de onderscheidene soorten van volzinnen) である。『和蘭文典』が翻刻されてからは、オランダ語学習のための不可欠のテキストとして使用されることになる。

坪井信道の伝記によれば、安懷堂では、文政12(1829)年に「ウエランド小文典」が学課としてはじめて使用される<sup>134)</sup>。天保2(1831)年ころに安懷堂に入門した青木周弼の伝記にも、つぎのような記述がみられる<sup>135)</sup>。

信道の教育方が最も斬新適切なものであつた。信道は蘭學を教授するのに、初めて和蘭文典—ウエーランドの文典—を用ひたので、學生の蘭文を讀解する力は極めて早く上達した。

それらは、『新撰洋学年表』の記述に依拠したものであろう。文政12(1829)年の条には、「坪井信道三五医家を江戸深川に開き其学塾を日習堂と命し蘭學を教授す始てウエランド小文典を用いたり」とするされる<sup>136)</sup>。

いっぽう、天保元(1830)年10月、安懷堂開塾の翌年に入門した川本幸民は、「和蘭文典」、すなわちマートシカッペイ文法書をつかったという<sup>137)</sup>。

幸民が坪井誠軒の塾におつたころ、たまたま伊東玄朴が長崎から、和蘭の文典「ガラマンチカ」と「センタキス」の二冊を持ちかえつていたので、幸民は緒方洪庵、青木周弼と三人でこれを謄写し、相共にじつに血のにじむような刻苦精勵の後、ようやくにしてその完譯に成功したが、わが邦で和蘭文典を講釋したのは、これが最初であるといわれ、この三人は信道門下の三哲として、その頃の蘭學書生の、崇敬の的であつたという。

シーボルトのもとでまなんでいた玄朴が「ガラマンチカ」と「センタキス」からなるマートシカッペイ文法書を江戸にもちかえたのは文政11(1828)年11月である。玄朴が下谷和泉橋通御徒町に象先堂をひらき、「マートシカッペイ文法書」を「塾課」とした<sup>138)</sup>のは天保4(1833)年のことである。天保9(1838)年10月に淡輪太郎(中洲)という坪井塾生が『和蘭文典』前編の一部を書写したといわれる<sup>139)</sup>。書写したのは、オランダ語の学習のためである。坪井塾には、『和蘭文典』が架蔵されていたのだろうか。

信道が没した嘉永元(1848)年に女婿の信良が筆写したといわれる「日習堂蔵書目録」<sup>140)</sup>には、「沕乙蘭土文典」、すなわちウエーランド小文典はふくまれるが、マートシカッペイ文法書はふくまれない。ちなみに、安懷堂・日習堂には、下記の語学関係の原書や写本が架蔵されていた。

○原書の部

沕乙蘭土字書	11本
沕乙蘭土学語	1本

アブラハン字書	2本
麻林字書	2本
ハンノット字書	2本
沔乙蘭土文典	1本
ベイエル	1本
フランス文典	1本
○写本の部	
ベエイル	5本
道訳ハルマ	8本
道訳ハルマ	20本

坪井塾に架蔵されたオランダ語の文法書は、ウェイランドの『オランダ語文法基礎』と「ベイエル」または「ベエイル」、すなわちベイエルの『オランダ語作文提要』だけである<sup>141)</sup>。「沔乙蘭土字書」は「坪井本の『詳解オランダ語辞典』」,「沔乙蘭土学語」は「ウエイランドの『学術用語辞典』」,「ハンノット字書」は、長崎に舶載されたジャック・ハンノット共編のラテン語辞典『羅蘭辞典』(Jacques, B. & S. Hannot, Dictionarium latino-belgicum. Dordraci, Th. Goris; Rotterdami, P. vander Slaart, 1699)であり、蘭学者や通詞がゾーフ・ハルマなどに記載されていない単語をしらべるために利用したものである。そのほかに、「道訳ハルマ」、すなわちゾーフ・ハルマや「麻林字書」もふくまれる。「麻林字書」とは、オランダに移住したフランス人語学教師マーリン(Pieter Marin)が編纂した仏蘭辞書のことである。マーリンの辞書は、何種類か長崎に舶載されるが、そのなかの『仏蘭語の基本概念と用法の学習のための新方法』(Nouvelle méthode pour apprendre les principes et l'usage des langue française et hollandaise)は、文化11(1814)年から同14年ころにかけ、長崎のオランダ通詞の本木正栄、榎林高美、吉雄永保によって編訳される。『仏郎察辞範』とよばれる日本最初の仏和辞書である<sup>142)</sup>。稿本4巻、全247丁の仏和辞書は、1775年版の原本を底本とし、幕府の命により、オランダ商館長ドーフの指導のもとに編集される。マーリンの仏蘭辞書については、「昔長崎にて西善三郎ハ『マーリン』の釋辭書を全部翻譯せんと企しと聞しか手初迄にて事成らず」といった経緯もある<sup>143)</sup>。

「日習堂蔵書目録」には、マートシカッペイ文法書はふくまれない。それは、信道がマートシカッペイ文法書を学課として位置づけていなかったからではないだろうか。にもかかわらず、塾生のあいだでマートシカッペイ文法書がつかわれていたとすれば、信道がオランダ語の学習方法については、塾生にまかせていたことになる。

マートシカッペイ文法書は、天保期以降、翻刻されただけでなく、『和蘭文典凡例』のような翻訳も板行される。さらに、適塾のような私塾だけでなく、萩藩好生堂のような藩医学

校でもオランダ語学習のためにつかわれる。ウエイランドの辞書は定評があったが、文法書としては、マートシカッペイ文法書がよくつかわれる<sup>144)</sup>。

時代はくだるが、初学者がマートシカッペイ文法書によりオランダ語を習得する安政3(1856)年4年ころの洪庵の適塾におけるオランダ語の学習風景をながめてみよう<sup>145)</sup>。

先づ始めて塾に入門した者は何も知らぬ。何も知らぬ者に如何して教へるかと云ふと、其時江戸で翻刻になつて居る和蘭の文典が二冊ある。一をガランマチカと云ひ、一をセインタキスと云ふ。初學の者には先づ其ガランマテカを教へ、素讀を授ける傍に講釋をもして聞かせる。之を一冊讀<sup>よみをは</sup>了るとセインタキスを又其通りにして教へる。

適塾において、オランダ語の学習のためにつかわれたのは、箕作阮甫が復刻した『和蘭文典』、すなわちマートシカッペイ文法書である。『西洋学家訳述目録』によれば、洪庵の訳述書として『マートシカッペイ語法書』があげられる。

安政元(1854)年に適塾に入門した大村藩の長与専齋は「余は是の年の秋初級文典の會に入り、明くる安政二卯年春文典後編の會に移れり」<sup>146)</sup>と述べている。専齋は、安政5(1858)年には福沢諭吉の後任として塾頭に推挙される。入門したばかりの専齋は、塾師のもとで素讀をくりかえし、講釈をうけながら、半年の歳月をかけ、「ガランマチカ」を習得する。ひきつづき、同様に「セインタキス」を習得する。専齋も『和蘭文典』全編を書写したのであろう。適塾では塾師の役割を会頭がになう。

『和蘭文典』全編をおえ、辞書をひもときながらオランダ語原書を読解することができるようになると、オランダ語原書の講読のグループにうつり、会読にくわわる。会読は、荻生徂徠が儒学の教授・学習方法として導入したといわれる<sup>147)</sup>。徂徠は、「師教よりは朋友の切磋にて知見を博め學問は進侯事に侯。(中略)朋友に交り門風に染侯事是第一の事に侯」<sup>148)</sup>と考え、学問にこころざす塾生がたがいに自由な議論のなかで競いあい、切磋するために会読という協同学習を考案する。徂徠が導入した会読は、のちに萩藩学明倫館の第2代学頭になる徂徠の高弟山県周南にうけつがれる。周南から永富独嘯庵にうけつがれ、その門人亀井南冥にうけつがれる。その後、南冥の門人広瀬淡窓、さらに蘭学者の坪井信道、その弟子緒方洪庵へとうけつがれる<sup>149)</sup>。

蘭学塾が教授・学習の方法や形態をとりいれたといわれる豊後日田の咸宜園<sup>150)</sup>では、素読・輪読・聴読・輪講・会講という教授・学習の段階が無級、9級上下の19の等級にわけられる。素読だけでも1級下から3級下までの5等級にわたり、1級下は「大学素読」、「中庸素読」、1級上は「孝教素読」、「論語素読」というように等級ごとに課書が設定される。坪井塾でも、各段階ににおいて、初歩的な課書からはじめ、しだいに難解な課書にうつる。坪井塾の会読は、信良の代にもかわらなかつたであろう。

月に何回か、例へば一・六とか三・八とか日を定めて、一同が集まつて塾頭の支配で回

読を遣り又は講釈があつた。教科書としては初歩のものとしてエスポルチングの生理学、ヤンキーヘンキーの問答書と言ふやうなものが一般に行はれてゐた<sup>151)</sup>。

坪井塾では、「回読」、すなわち会読にうつつばかりの学習グループの課書として、「エスポルチングの生理学」、「ヤンキーヘンキーの問答書」といった初歩的な蘭書が指定される。「エスポルチングの生理学」は、「日習堂蔵書目録」の「イスホルヂンク」である。「イスホルヂンク」、すなわちドイツ人イスフォルディング (J. N. Isfording) については、宇田川玄真、緒方洪庵、広瀬元恭にそれぞれ『伊斯忽爾陳屈教示内外科学徒窮理説』、『医家須読理学入門』、『理学提要』という訳著があり、宇田川・坪井一門で重視された教科書である<sup>152)</sup>。

寺地強平は、文化6(1809)年に備後福山城下に生まれ、入門期はさだかではないが、天保8(1837)年には帰郷し、のちに福山藩学誠之館の洋学寮教授に登用される。強平の碑にはつぎのように刻まれる<sup>153)</sup>。

先生備後福山人、初學漢醫、方年十九、讀醫範提綱、概然曰、濟生眞理在此矣、文政十二年春、問業于京師、當時京阪間、原書未行、概唯講譯書、先生奮長崎遊、始讀蘭書、研精三年、遂東入江戸坪井信道之塾、與緒方洪庵及青木川本諸子日夕討論、業大進焉、天保八年歸郷

強平は、宇田川玄真が訳述した『医範提綱』を閲読し、「濟生眞理」が西洋医学にあると確信する。西洋医学に転向した契機は信道とおなじである。強平は、文政12(1829)年に京都で開業するが、京都や大阪では、当時、原書による西洋医学の教育・研究がおこなわれていなかったために、長崎に遊学し、はじめてオランダ語原書を目にする。3年後、江戸におもむき、坪井塾に入門する。坪井塾では、周弼などの「信道門下の三哲」の「討議」にくわり、学業がすすんだという。「討議」は、広義の会読または輪読である。

坪井塾では、会読がどのようにすすめられたか、実態は把握できない。信道の門弟であった洪庵の適塾の会読風景をながめてみる<sup>154)</sup>。

會讀は一六とか三八とか大抵日が極つて居て、いよいよ明日が會讀だと云ふ其晩は、如何な懶惰生でも大抵寝ことはない。ゾーフ部屋と云ふ字引のある部屋に、五人も十人も群をなして無言で字引を引きつゝ勉強して居る。夫れから翌朝の會讀になる。會讀をするにも籤で以て此處から此處までは誰と極めてする。會頭は勿論原書を持って居るので、五人なら五人、十人なら十人、自分に割當てられた所を順々に講じて、若し其者が出来なければ次に廻す。又其人も出来なければ其次に廻す。其中で解し得た者は白玉、解し傷ふた者は黒玉、夫れから自分の讀む領分を一寸でも滞りなく立派に讀んで了つたと云ふ者は白い三角を付ける。夫れは只の丸玉の三倍ぐらゐ優等な印で、凡そ塾中の等級は七、八級位に分けてあつた。而して毎級第一番の上席を三ヶ月占めて居れば登級すると云ふ規則で、會讀以外の書なれば、先進生が後進生に講釋もして聞かせ不審も聞いて

遣り至極深切にして兄弟のやうにあるけれども、會讀の一段になつては全く當人の自力に任せて構ふ者がないから、塾生は毎月六度づゝ試験に逢ふやうなものだ。

会読は、昇級試験でもある。会頭は、机のうえに判定簿と課書一冊をならべ、グループ・メンバーが課書のあらかじめ指定された部分をすこしづつ訳読するのを聞く。正確に訳読すれば、○印、誤訳であれば●印を判定簿にする。担当部分をよどみなく訳読すれば△印がしるされる。それは○印の3倍に相当する。解読ができないばあいや誤読のばあいには、つぎのメンバーが訳読する。適塾では、塾生は8級に等級化されていたが、3ヶ月のあいだ当該等級の主席をしめたばあいに、進級することができる。

適塾における進級制度は、儒学塾において考案されたものを精緻にしたものである。管見するかぎりでは、亀井南冥が明和元(1764)年に福岡唐人町にひらいた私塾蜚英館の学規にその原型がみられ<sup>155)</sup>、南冥門下の広瀬淡窓が九級の月旦評にうけつたものである。淡窓じしん「文學ニ與ラス他藝ヲナス者迄モ。往々此風ニ倣ヘリ」<sup>156)</sup>と述べている。高野長英、大村益次郎、上野彦馬といった蘭学者も、淡窓の咸宜園から巣立ち、それぞれに蘭学塾をひらく。信道は、淡窓の門人ではなかったが、私的な交遊をともし薫陶をうける。淡窓が述べるのとおり、月旦評にみられる実力主義にもとづく進級制度の原理は蘭学塾にもうけつがれる。

会読の課程をおえると、独看にすすむ。塾師として、後進のために素読を指導したり、会読の進行役をつとめたりしながら、蘭書を独力で読む。疑義があるばあいには、先輩に教えるを乞い、さらに師の信道に教えるを乞う。独看の段階の塾生があつまり、蘭書を輪読することもある。信道は、風雲堂に入門後3年を経た文政6(1823)年には、独看の段階にすすんでいたのであろう。玄真のすすめにより『プールハーフェ箴言註解』の翻訳に着手する。信道は、文政11(1828)年ころには「神經熱之書」を1日おきに仲間と会読し、翻訳に着手する<sup>157)</sup>。

坪井塾の門生のなかにも、在塾中に蘭書を翻訳するものもあらわれる。足守藩出身の緒方洪庵は、安懷堂入門後1年半あまりたった天保3(1832)年12月には『人身究理学小解』を訳了する。「日習堂蔵書目録」によれば、日習堂にはオランダ語の原書50種、写本15種が架蔵されていた。そのなかに、「ブリュメンバック原生」、「ヘーマンス原生」、「依百乙原生」、「ローセ原生」、「リセランド原生」といった生理学書が架蔵されていた。信道がどの程度自覚していたかさだかではないが、生理学書に関しても、おおくはドイツ語原著からのオランダ語訳である。

「ブリュメンバック原生」は、ドイツのゲッチンゲン大学教授ブルーメンバッハ (Johann Friedrich Blumembach) があらわした原著の蘭訳書『生理学入門』(Grondbeginselen der natuurkunde van den mensch) である。「ヘーマンス原生」は、「ヘイマンス『一般生理学基礎』」といわれる<sup>158)</sup>が、詳細はわからない。「依百乙原生」は写本であり、オランダのライデン大学教授イペイ (Adolf Ypei) が著述したか、オランダ語訳したものであろうが、詳細

はわからない。イペイは、ヘンリー（William Henry）の『化学概略』（An Epitome of Chemistry）をオランダ語訳し、1803年に『初心愛好家のための化学』（Chemie voor Beginnende Liefhebbers）として刊行する。宇田川榕庵の『舎密開宗』は、イペイの化学書を基礎としたものである<sup>159</sup>。「ローゼ原生」も写本であり、ドイツ人内科医ローゼ（Theodor Georg August Roose）があらわした原著をオランダ人内科医イプマ（Martinus Sjoerdzoon Ypma）が蘭訳した『人体物理学便覧』（Handboek der natuurkunde van den mensch）である<sup>160</sup>。「リセランド原生」は、フランス人外科医リシュラン（Anthelme Balthasar Baron Richerand）の『新生理学入門』（Nieuwe grondbeginselen der natuurkunde van den mensch）の蘭訳である。

洪庵が翻訳したのは、ドイツ人内科医ローゼ原著の『人体物理学便覧』である。同年、高野長英が日本で最初の生理学書である『医原枢要』を編訳・板行していたが、『人身究理学小解』は「よくまとまつた生理學の本」としてひろく筆写される<sup>161</sup>。

萩藩領出身の青木周弼は、洪庵とおなじころに坪井塾に入門し、在塾中に翻訳にたずさわったとおもわれるが、管見にはいらない。『西洋学家訳述目録』の周弼の項にはつぎのような書目があげられる。

医院類案察病編	一
袖珍内外方叢	三
病理論	

周弼は健康をそこね、天保6（1835）年春に帰郷する。『病理論』は、洪庵の『病学通論』序にしるされているとおり、江戸遊学中に信道の紹介により師事した宇田川玄真にすすめられたものであろうが、中断したと考えられる。『袖珍内外方叢』は、周弼が天保8（1837）年秋から1年ほど長崎に滞在したさいに、緒方洪庵、伊東南洋（岡海蔵）とともに共訳したものである。『医院類案察病編』については、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵の伊東玄朴重訳の『醫療正始：附醫院類案』とのかかわりについてしらべていたところ、富士川文庫に箕作阮甫・青木周弼訳の『医院類案』が所蔵されていることが判明した<sup>162</sup>。周弼にとって、阮甫は玄真門下の大先輩である。この『医院類案』については、稿をあらため論じる。

黒川良安は、弘化元（1844）年に堀内忠寛、青木研蔵とともにフランス人外科医リシュランの『新生理学入門』の蘭訳書を訳述し、『医理学源』と題し、版行する。3人の接点は信道にある。良安は、文化14（1817）年、越中大榎木村の村医黒川玄龍の子に生まれる。文政11（1828）年、11歳のときに玄龍の長崎遊学に随従し、通詞の吉雄権之助に蘭学を、シーボルトに医学をまなぶ<sup>163</sup>。天保8（1837）年ころ、長崎に遊学していた坪井門下の青木周弼と緒方洪庵から江戸の坪井塾で研鑽するようすすめられ、天保12（1841）年に坪井塾に入門する。良安は、入門後ただちに「ルール」（leren）、すなわちオランダ語を教授する<sup>164</sup>。良安は、オランダ語に習熟していたが、11歳のときからオランダ語の習得に専念し、漢学の基礎的な教養は

じゅうぶんに身につけていない。そのため、幕府儒官の杉原平助につき、漢学をなまぶ。弘化元(1844)年には、佐久間象山の家に寄寓し、漢学をまなび、オランダ語をおしえる。

忠寛は、米沢藩医の家に生まれ、文政3(1820)年に藩主に随従し、江戸におもむき、青地林宗に師事する。帰国後、米沢藩主上杉斉定の側医に登庸されるが、文政12(1829)年以後は江戸に滞在する。信道は、青地林宗の長女糸をめとり、天保4(1833)年2月に林宗が没すると、遺族8人をひきとる。忠寛は、坪井家に入出入りするうちに信道と親交をむすび、終生、かわることがなかった。研蔵は、天保14(1843)年に江戸におもむき、伊東玄朴塾に入門する。坪井塾にも出入りし、兄周弼の旧師である信道に接する機会もすくなくなかった。研蔵は、兄の周弼とともに長崎に滞在するうちに良安と知りあう。かれらが訳述した『新生理学入門』は、坪井塾に架蔵されていたものである。

坪井塾では、信道がそうであったように、在塾中に蘭書を翻訳することが不文律になっていたのではないであろうか。信道は、「能治<sup>スル</sup>難<sup>レ</sup>治之技倆」にすぐれた西洋医学の臨床の有効性を確信していた。蘭書を翻訳する能力を身につければ、蘭書の翻訳によって得た知見を医療活動にいかすことができる。

信道は、蘭学者としての自負心についてみずから述べている<sup>165)</sup>。

江戸洋学家無数御座候へども、多分山師俗子のみ(中略)当時、教授<sup>ばか</sup>斗りも勤苦仕<sup>リ</sup>候は小子一人なり。此節、塾生八九人と研磋仕<sup>リ</sup>候。尤も御存じの不才無術、決して捷快之事無<sup>ク</sup>之、返<sup>かえすがえす</sup>々も口惜しき次第に御座候

蘭学者は、医業を金儲けの手段とみなす「山師俗子」ばかりである。そのなかで、信道は、毎朝、「解剖・生理・薬物・病理・診断等の諸學」を講じるだけでなく、定日には臨床授業をおこなう。信道が病院と医学校をかねる坪井塾をひらいたのは、臨床医として医療実践にたずさわると同時に、医学者として蘭書を翻訳する能力を身につけ、おおくの臨床例をまなんだ西洋医を養成するためである。

## 五 萩藩医

坪井信道は、萩藩領出身者を蘭学者としてそだてただけでなく、萩藩医として萩藩とかかわりをもつ。天保11(1840)年9月に萩藩に医学館が創設されるまでは、医学をこころぎすものは、自宅で父兄にまなぶか、他の医師につくか、他国に師家をもとめるか、いずれかであった。藩から遊学の許可を得て、坪井塾に入門したものは、松村太伸と松原玄甫だけである<sup>166)</sup>が、地下医のなかにも周防三田尻の莊原玄快、同梅田順造、長州厚狭の芝原玄快、周防大島の青木周弼、長州萩の松島祐伯(剛蔵)、防州宮市の国本見竜などのように坪井塾に入門したものがいる。

なかでも青木周弼は、坪井塾で修業をつんだのち、一代雇の萩藩医にとりたてられ、その



後、創設期の藩立医学館の蘭学教授、譜代藩医、御側医、好生堂教諭役を歴任する。その間、萩藩への蘭学導入の基盤を整備する。江戸遊学中には、「信道門下の三哲」として尊崇され、文久2年4月に西洋医学所の初代頭取大槻俊斎が病没すると、後任頭取への就任を要請されたほどに、同時代の蘭学者からたかい評価をうける。



図9 嘉永・慶応江戸切絵図——深川冬木町界限<sup>167)</sup>

信道と萩藩とのかかわりは、信道が文政12(1829)年に江戸深川上木場三好町のちいさな借家で開業し、安懷堂をひらいたときにはじまる。信道の居宅は、松平大膳太夫、すなわち萩藩主の下屋敷の近所であったために、信道は江戸勤番の萩藩士の診療のために藩邸に出入りするようになる。天保3(1832)年2月、信道は深川冬木町にうつるが、冬木町の居宅も萩藩の下屋敷にちかいたために往診に出入りする。図9は本所深川絵図である。中央の空き地が萩藩下屋敷跡である。元治元(1864)年7月の蛤御門の変ののち、江戸市中の萩藩の土地や建物は幕府により没収され、更地になっていた。萩藩下屋敷からみれば、信道の三好町の居宅は右に、冬木町の居宅は上に位置する。

信道は、村田清風と私的に親交をむすぶ。清風は、天保4(1833)年8月、葛飾砂村の萩藩別邸手元役として江戸に着任し、文政7(1824)年に葛飾別邸に隠居した第10代藩主<sup>なりひろ</sup>斉熙に近侍していた。信道は、萩藩医の能美洞庵とも交遊する。洞庵は、天保6(1835)年、藩主毛利斉元の侍医として参勤に扈従し、江戸に滞在していた。天保8(1837)年12月には、襲封したばかりの藩主敬親は藩士の診療を慰勞し、信道に銀15枚をおくる<sup>168)</sup>。

天保9(1838)年8月、清風が地江戸両仕組掛を命じられると、信道はいわゆる囑託医を委

嘱される。「坪井信道履歴」にはつぎのようにしるされる<sup>169)</sup>。

仕官 天保九年年甫四十四事長門萩城主松平大膳太夫俸禄三百石

「仕官」とはいえ、実態は江戸詰の萩藩士の診療にあたる勤務医にすぎない。しかし、300石の俸禄は破格である。

翌天保10(1839)年2月、信道と藩主側医の能美洞庵の推薦により、青木周弼が一代雇の藩医に登庸され、年米25俵を支給されることになる。ふたりとも周弼の旧師である。そこに清風の意向が反映していたことはいうまでもない。周弼は、萩藩領の大島郡和田村出身であり、信道の門人のなかでも緒方洪庵とともに新進の西洋医として知られる。周弼が天保11(1840)年9月の藩医学校の創設にさいし蘭学教授を命じられ、「蘭書シヨメール」の翻訳にたずさわったことから窺われるとおり、周弼に期待されたのは、藩医としての職務ではない。「蘭書シヨメール」は、萩の豪商熊谷五右衛門から借りうけたものであり<sup>170)</sup>、蛮書和解御用が『厚生新編』として翻訳したシヨメールの『家政辞典』の蘭訳書である。周弼は、信道、伊東玄朴などと同様に、蘭学者としての資質・能力を評価され、藩医に登用される。萩藩が設置しようとしたのは、たんなる医学校ではなく、幕府の蛮書和解御用のような蘭学の研究教育施設をかねそなえたものである。

萩藩が信道と周弼を萩藩医として登庸した事情は、村田清風が推進する藩政改革の枠組みのなかで検討しなければならない。

清風は、天明3(1783)年、日本海岸に面した長門国大津郡三隅村沢江の萩藩士村田四郎右衛門の長男に生まれる。清風の青年期には、萩藩、ひいては日本をめぐる国際的環境に変化がきざしていた。

文化元年おろしや船願之趣有之長崎渡來文化三年正月先達ておろしや船渡來通商相願侯處無御許容歸帆致し侯得共若渡來及異儀侯ハゞ不及伺打拂申付諸事寛政三年御觸達之趣に准じ取計之御沙汰同四年十二月おろしや船取計去寅年御達有之侯處其後蝦夷嶋え來り狼藉に及び侯に付おろしや船と見請侯ハゞ嚴重に打拂可申之旨御觸達文化五年八月長崎えいぎりす船渡來及狼藉侯<sup>171)</sup>

日本海海岸にはしばしば唐船が漂着していたが、19世紀になると、日本近海に欧米の捕鯨船が出没しはじめただけでなく、ロシアをはじめ欧米諸国の船舶が来航するようになる。文化3(1806)年には、ロシアの実業家レザノフ(Николай Петрович Резанов)が幕府の通商拒絶にたいする報復として樺太、択捉などの北辺の地を襲撃する。文化5(1808)年8月には、イギリス船フェートン(Phaeton)号が長崎港に侵入し、狼藉をはたらいたすえにたちさる。いずれも鎖国体制をゆるがす深刻な問題をなげかける事件である。清風は、明倫館に架蔵される『海国兵談』<sup>172)</sup>の「本邦ノ武備ハ外寇ヲ防ク術最氏急務トス」という主張に首肯し、全巻を筆写する。

清風は、明倫館書物方を命じられた文化3(1806)年ころ、海防のための施策をねりはじめた。冒頭に引用したとおり、清風は、文化露寇事件がおこると、「我を量り彼を知」るために明倫館書物方として江戸在勤の藩士とともに海寇に関する書物を収集する。軍事面では、のちに「我を量」ることにより神器陣が廃止され、「彼を知」ることにより西洋銃陣が採用されることになる。神器陣は、天山流にもとづく萩藩独自の陣形であり、「車臺に大筒を中心として左右に十匁筒三四十を備へ刀鎗の數隊を其後に配置し大筒小筒交々亂射して敵兵の色稍動くを機とし刀鎗の諸隊は硝煙濛々の間より突然出現して敵兵を撃つもの」である<sup>173)</sup>。清風は、国禁の洋書を秘蔵し、平安古の自邸で関心をいだくものに閲覽させるが、藩内にはオランダ語の原書を解説するものはいない。江戸でも、西洋医書の翻訳が本格化しはじめたばかりである。『山口県文化史年表』の天保10年の項に、「萩に洋学会起る」という記述がみられる<sup>174)</sup>が、清風が収集した洋書とかかわりがあるのであろうか。

天保9(1838)年8月、清風は葛飾別邸手元役を免じられ、地江戸両仕組掛を命じられる。「仕組」は「家系整理や藩の経済立直しの方法や行為」を意味する<sup>175)</sup>。清風は、天保11(1840)年4月、財政再建が進捗しないために辞任を申し入れるが、翌5月にあらたに江戸当役用談役を命じられ、本格的な藩政改革にのりだす。その7月には、3年にわたり練りあげた腹案を「流弊改正意見」としてまとめ、上申する。ただちに天保改革が発令される。改革が本格化する過程で、あいついでアヘン戦争の報がつかえらる。海防問題は、喫緊の課題として改革の一環にくみこまれる。

萩藩が海防問題に積極的にとりくまなければならないのは、つぎの事由による<sup>176)</sup>。

巴城は御兩國の腹心、宗廟の在す所、上々様方御坐所、山陽山陰の首領なり、北海を受、英夷魯西亞墨利加佛夷より一筋の海路なり、航海の術ニ熟したる戎狄なれハ、いつ何時夜込朝驅致間布ものにてもし、無時之時ニ當而、早々御防禦の御備被仰付度事なり  
萩藩は、中四国の雄藩である。その中枢である萩城下は、日本海に面し、欧米諸国とは「一筋の海路」でつながる。航海術に熟練した欧米諸国はいつでも侵略することができる地理的条件にある。『海国兵談』は「細ニ思フニ江戸日本橋ヨリ唐阿蘭陀マテ境目ナシノ水路ナリ」<sup>177)</sup>とする。青海原は、もはや通交を遮断することのない「水路」や「海路」と化したという認識である。

信道は、いわゆる囑託医として萩藩士の診療にあたっていたが、天保13(1842)年4月28日付で萩藩医に補任される。その間の経緯について、信道はつぎのように述べている<sup>178)</sup>。

去月廿八日長州家へ被<sub>レ</sub>召抱<sub>レ</sub>、百五十石被<sub>レ</sub>宛行<sub>レ</sub>候。尤先年以來二三之諸侯より沙汰も有<sub>レ</sub>之候へ共、何も当直或ハ国供等有<sub>レ</sub>之趣ニ付、皆々相断申候處、今般長州家ニ於而ハ、病用之外、平生ハ定タル当番ニも不<sub>レ</sub>及、国許へ被<sub>レ</sub>召連<sub>レ</sub>候事も無<sub>レ</sub>之、其他総而世間治療之妨ニ相成候無益之事ハ、一切被<sub>レ</sub>差免<sub>レ</sub>候旨ニ御座候間、一ハ子孫之為メ、一ハ自己

安心之為承諾仕侯

諸藩は、オランダ語に堪能な蘭学者をめぐり争奪戦をくりひろげていた。信道も、いくつかの藩から藩医として仕官するよう打診される。しかし、それらは国元での勤務をもとめるものであり、信道はいわゆる病院兼医学校を放棄しなければならない。萩藩が提示したのは、江戸定府として藩邸外居住をみとめるという条件である。江戸深川の病院兼医学校を拠点とした活動が制約をうけることはない。農民の出である信道は、藩主の側役をつとめる能美洞庵の「育<sup>はぐくみ</sup>」となり、正式に萩藩医になる。「育」は、「他人を養子とし、又は養子となることで、家督とは関係なく、これによって立身又は縁付などの条件をよくすることを目的とする戸籍関係」を意味する<sup>179)</sup>。

萩藩では、新規登用者に支給される初任給は年米25俵が上限であった<sup>180)</sup>。信道が藩の要請をうけ入れたのは、「一ハ子孫之為メ、一ハ自己安心之為」でもある。おそらく年米の加増という条件を提示されていたのであろう。それは、つぎのような事情による<sup>181)</sup>。

病者ヲ視ルニ貧富ヲ以テ厚薄ヲ為サ、ルニ止マラス、貧者ニハ藥餌、米塩、薪炭ヲモ併セテ施與ス。又諸藝人儒家、書画家、詩文家、篆刻家、音曲師等及ヒ僧侶ヨリハ謝儀ヲ受ケス。強テ之ヲ贈ル者ニハ必ラス價格相適スルノ物品ヲ寄テ之ニ報フ。病者貧困ニテ死スルアレハ香資ヲ與フ。素ヨリ惻隱仁恤ノ念ヲ以テ人ニ接スルカ故ニ収納スル所少ナカラサルモ消費スル所亦甚タ多シ。是ヲ以テ畢生餘財ナク、又継テ蓄積スルノ意ナシ。又所用薬品ノ代價ヲ聞クヲ欲セス、唯其品位ノ清良ヲ撰フ。曰ク價直ヲ知ルアレハ、配劑ノ際分量ヲ記スルニ方テ或ハ妨碍アラント。其廉潔スノ如シ。今日世醫ノ通習、診察料云々、東代云々、之ヲ大書シテ藥室ニ揭示シ、傲然トシテ耻ナク、汲々乎トシテ唯利ニノミ奔走スル者、先考ノ所業ヲ顧想スルアアラハ其心果シテ如何ノ感覺ヲ起スヘキヤ。將ニ慙死スヘキナリ。

信道は、貧しい患者からは診察料や薬代を請求しないだけでなく、米、塩、薪炭をほどこし、死亡したばあいには、葬式代をあたえる。岳父青地林宗の没後、遺族をやしなっていた。天保13(1842)年ころ、信道の年収は「近年六七百両之間」<sup>182)</sup>である。高額所得者であるが、「惻隱仁恤」の支出もおおい。

嫡子の信友は、天保3(1832)年の生まれである。信道は、幼く病弱の信友の前途についても配慮しなければならない。信友は、信道が嘉永元(1848)年11月に病没すると、15歳で信道を襲名し、萩藩医の地位をうけつぐ。父の盟友堀内忠寛(素堂)、父の門人であった広瀬旭莊と緒方洪庵のもとで修業する。信友は、安政5(1858)年3月以降、江戸の桜田藩邸で毎月2、3回ひらかれる蘭書会読会にも積極的に参加する。蘭書会読会は、藩主侍医の青木周弼の建言により設置されるが、幕府講武所教授の村田蔵六がおもに選書にあたる<sup>183)</sup>。信友が西洋の軍事科学の導入に積極的に関与したことがうかがわれる。元治元(1864)年8月の蛤御門

の変ののち、萩藩に追討の勅命がだされる。江戸在府の萩藩士がことごとく拘禁されるなかで、信友はみずから出頭し、幽閉される。2年後の第二次長州征討後に和議がむすばれると、信友は萩藩に護送される。山口では、世子元徳の副侍医、医業録所相談役、医学館長兼病院総督に任じられるが、慶応3(1867)年に病没する。肺結核であったといわれる。

弘化元(1844)年、信道は萩藩の内用掛に任じられ、「海防の事宜に關し進言する」よう命じられる。翌弘化2(1845)年、青木研藏も内用掛に任命され、「博く泰西の書籍を閲し苟も海防に益するものあれば腹藏なくし其説を進め」るよう命じられる<sup>184)</sup>。

研藏は、周弼の12歳年下の弟であり、文化12(1815)年の生まれである。天保2(1831)年4月に咸宜園に入門し、天保8(1837)年には周弼にしたがい、長崎に遊学する。その間、故郷の周弼のもとでオランダ語を習得し、西洋医学をまなんでいた。天保14(1843)年に江戸におもむき、伊東玄朴の象先堂に寄寓する。当時の研藏については、「西学は当時若手之内海内ニ指折之由ニ御座候」といわれる<sup>185)</sup>。

研藏の在塾中の弘化2(1845)年ころ、佐賀藩侍医の伊東玄朴は、佐賀藩から「防禦の儀に付御爲に相成候廉見聞候はゞ申出候様」命じられ、「御爲筋」を復命していた<sup>186)</sup>。当時、佐賀藩や鹿兒島藩は有能な蘭学者を発掘し、家臣団にくわえようと躍起になっていた。萩藩も同様である。

研藏は、坪井塾にも出入りし、兄周弼の旧師である信道に接する機会もすくなくなかった。信道は、研藏のオランダ語解読の能力をみきわめ、萩藩に研藏を推挙したとおもわれる。弘化2(1845)年4月、信道と研藏はあらためて「博く外國の書を讀み防備等の事に關して獻替する」よう命じられる<sup>187)</sup>。研藏は、同年10月、藩命により萩にもどり、翌弘化3(1846)年1月には「外國及諸藩の情勢調査」のために長崎におもむく<sup>188)</sup>。

弘化4(1847)年2月、研藏は嫡子雇により毛利家家臣団にくわえられ、松村太仲、東条英庵とともに西洋書翻訳御用掛に補任される<sup>189)</sup>。西洋書翻訳御用掛は、この年、異賊防禦御手当掛の所轄になっていた。西洋医書の訳著がある研藏は、「万国風土記之内英咭喇国都府龍動之部」の翻訳にたずさわる<sup>190)</sup>。『万国風土記』については、詳細はあきらかではない。

信道は、萩藩の内用掛として「海防の事」や「防備等の事」について献策するよう命じられるが、実際にはどのような役割を演じたのであろうか。

蘭学者のなかには、高野長英、大村益次郎などのように西洋の軍事科学に関心をよせるものもいた。しかし、信道は臨床医、また後進の育成にあたる塾主の職を天職と考えていた。『西洋学家訳述目録』によれば、信道には軍事科学に関する訳述はない。ただし、信道には海外情勢に関心をいだかざるをえない事情もあった。ひとつは、弘化年間になると、外国船が日常的に日本の沿岸に出没しはじめたことである。信道は、書簡にもしるす<sup>191)</sup>。

近日又々異国船評判大分カマヒスシ嘩カマヒスシく候。琉球ノフランス、松前ノロシア、遠州ニも去ル廿

四日一艘見へ候由、一昨日相州浦賀港ニ軍艦一隻渡来、伊豆沖ニも一隻相見へ候との事、巷議紛々愈不安候。尚遂々委敷事相分り可<sub>レ</sub>申候。

そうしたなかで、箕作阮甫の三女シンと結婚し、箕作家の婿養子となった省吾が弘化2 (1845)年から翌年にかけて世界地理書を版行する。信道の周辺でも、海外事情への関心がかまかる。

箕作阮甫子方ニテ、坤輿図説と申者上木いたし、五大洲近来之模様、沿革、軍戦兵力、土地広狭、戸数人数、盛衰等、ニューエンホイス其外ニユーブーク中より抄訳いたし、図も木版ニハ候へども、殊之外見事ニ出来、有益之書と被<sub>レ</sub>存<sup>192)</sup>候。

省吾が訳述したのは『坤輿図説』である。正編5巻3冊は弘化2 (1845)年に、補編4巻4冊は翌3年に板行される。「大貌利太泥亞」については、つぎのような記述がみられる<sup>193)</sup>。

土人常ニ好テ四方ニ貿易ス、其船大約二萬八千零八十一、其船上ニ役使スル卒、一十八萬四千名、其屬國領地、五大洲中ニ延亘ス、其所屬數國ノ地ヲ合シ、長ヲ絶テ短ヲ補ナヘバ、廣袤獨逸里法ニテ、十萬一千箇里方タリ、国王所持スル所ノ軍艦最モ夥シ、其數大煩四十門ヨリ、百二十門ヲ備フル者、八百四十六百年前記スル所、惟九十一艘アリ、故ヲ以テ海上ノ戦闘ニ於テ、西洋諸州之ニ抗衡スル者甚タ寡シ、和蘭國軍艦ノ如キ、洋中に於テ遇フキハ、遙ニ其旗章ヲ伏テ過クト云ヘリ

アヘン戦争の脅威は、イギリスにたいする警戒感をうみだしていた。イギリスの植民地は「五大洲」にひろがる。イギリスは、2800艘の商船だけでなく、大砲を装備する軍艦も800艘

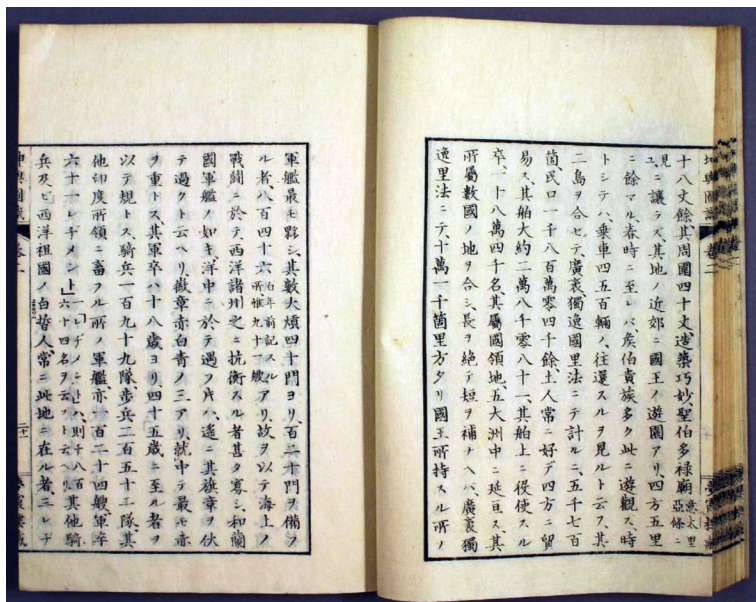


図10 『坤輿図説』——「大貌利太泥亞」

をこえる。その戦闘能力はたかく、ヨーロッパ諸国はイギリス軍艦との戦闘をさける。オランダ軍艦は、イギリス軍艦に遭遇したばあいには、国旗をたたみ、逃げ去る。

『坤輿図識』は、版をかさね、偽版も横行したといわれる。井伊直弼、鍋島直正などの諸侯や幕閣だけでなく、吉田松陰、桂太郎などの志士も熟読する。義父阮甫が訳述した『八紘通誌』とともに、尊皇攘夷から開国へとむかうなかで、人びとが世界像を形成するためにおおきな役割をはたす。

信道が海外情勢に関心をいだかざるをえなくなったもうひとつの事情は、高野長英が蛮社の獄に連座したことである。信道は青地宗林の長女衆をめとる。宗林の四女宮子を妻にむかえた長英は信道にとって義弟にあたる。天保8(1837)年6月、浦賀に到着したアメリカ商船モリソン(Morrison)号を無二念打払令にもとづき撃退させるという事件がおきたとき、長英は『戊戌夢物語』をあらわす。それは、「直ニ打拂に相成候は、日本は民を憐まさる不仁の国と存し、万一若又其不仁不義を憤り候は、日本近海にイギリス属島敷敷有之、始終通行いたし候へは、後來海上の寇と相成候て、海運の邪魔ニ相成罷成申すべく」<sup>194)</sup>として、幕府が異国船打払令を適用したことを批判するものである。当時、モリソン号はイギリス軍艦であると誤認されていた。長英は、天保10(1839)年5月、幕政批判の罪で永牢の判決をうける。弘化元(1844)年6月に脱獄逃亡するが、嘉永3(1850)年10月、江戸潜伏中に捕吏におそわれ、自害する。

この蘭学者にたいする弾圧事件は、たんに縁戚が連座したというだけでなく、西洋医学の研究にたずさわる信道自身が当事者でもあった。事件後の天保13(1842)年6月、幕府は図書出版の規則をさだめ、翻訳書を出版するばあいには町奉行所の許可をうけることになる。弘化2(1845)年には、医学館を拠点とする漢方医が蘭語医書の翻訳を禁止させようと幕府にはたらきかける。しかし、7月には「蘭書翻訳医書等」の出版についてはすべて天文方の許可をうけることになる。天文台での検閲業務は遅滞していたが、一斉に版行がみとめられる。西洋医学の旗手である信道が、その間、いかに閉塞感をいだいていたか、つぎの書簡からうかがうことができる<sup>195)</sup>。

此地ニ而も我道年々盛ニ相成申候。己ニ昨年も大府御医師より出願いたし、和蘭医書翻訳もの上木御制禁に相成り可、然旨上書いたし候処、却而御叱有、之、恐五年来、翻訳書にても医書之分ハ医学館ニ而上木之節相改候事ニ定り居候処、其後御免ニ相成、天文方山路弥左衛門殿方ニ而改を受候事ニ相定り、以前より一等我社之勢ヒ能く相成申候。翻訳書、一時ニ上木御免ニ相成、数年之鬱閉忽解散いたし申候。

安改5(1854)年7月、漢方界の総帥である多紀家が抵抗するなかで、「廣く萬國の所長御採用被遊候折柄に付御醫師中も有志の者は和蘭醫術兼學致し候とも不苦候」との達がだされる<sup>196)</sup>。病状が悪化した將軍家定の治療のために、伊東玄朴、戸塚静海、竹内玄同といった西

洋医が侍医に任じられる。いずれも信道の僚友であり、当代を代表する蘭学者である。信道は、すでに他界していたが、西洋医学はようやく幕府から認知される。

信道は、江戸詰の清風や参観に随行する能美洞庵と懇談し、知見を披瀝していた。信道が内用掛として演じた役割、すなわち清風が信道に期待したのは、海外情勢に関する知見だけではなく、はばひろい蘭学者の人脈ではないであろうか。

臨床医師である信道は、海外情勢や軍事科学といった分野は門外漢である。しかし、当時、西洋にひらかれた眼をもつのは、オランダ語原書を解読できる蘭学者だけである。門外漢とはいえ、西洋医書を涉猟するうちに、西洋医学の背後にある西洋文明に関する洞察をふかめ、海外情勢についても知見を得ていたはずである。

信道は、江戸の代表的な蘭学者はもとより、大坂や京都の蘭学者とも親交をむすぶ。江戸の「三大西洋家」仲間との交友は親密であった<sup>197)</sup>。

伊東玄朴戸塚静海ト名ヲ齊フス。共ニ大ニ流行ス。而メ三氏交誼親密ナルト同胞ノ如シ。一大患者アル毎ニ必ラス三氏商議シテ法ヲ處ス。絶テ面従背販スルトナシ。世人評シテ曰ク、伊氏ハ治ニ巧ナリ、戸氏ハ外科術ニ精シク、坪氏ハニ密ニシテ片言證アリ。且学識品行ハ遙ニ二氏ニ超絶スト

さらに、信道門下から緒方洪庵、川本幸民、青木周弼、黒川良安などが巣立っただけでなく、すでに蘭学者としての地位を確立した門生も異材をおくりだしていた。「西洋事書籍篤僉可仕事」<sup>198)</sup> という方針のもとで蘭書を収集したとしても、それらを解読することができなければ、海防策や軍事力の強化策を立案することはできない。信道自身がかりに海外情勢や軍事科学に関する蘭書を訳述したとしても、断片的であったであろう。それよりも、みずからの人脈をとおり、有能な蘭学者を発掘・推薦し、萩藩の家臣団のなかに組み入れるのが、信道に課せられた役割である。

信道は、弘化 4 (1847) 年、村田清風に年賀状をおくる<sup>199)</sup>。清風は、依願により江戸手元役を免ぜられ、弘化 2 (1845) 年 9 月、生まれ故郷の天津郡三隅村に帰住していた。

御国表、海防逐年御盛ニ相成候由、逐々伝聞仕候。全く尊老往年御配慮之所致と奉存候。

信道が発掘・推薦した蘭学者が萩藩の海防策を推進していた。それは、藩政改革を主導した清風が企図したものである。

信道は、嘉永元(1848)年11月8日、胃癌により没する。周弼は、安政 5 (1858) 年 3 月以降、江戸の桜田藩邸で毎月 2、3 回蘭書会読会をひらく。蘭書会読会は、「蘭書の会読や新書の翻訳を行い、時局に対応しよう」という課題<sup>200)</sup> をこなすが、同時に有能な蘭学者を発掘する場でもある。周弼によって制度化された蘭学者の発掘システムは、実際に村田蔵六のような軍事専門家を発掘する。



おわりに

本稿では、青木周弼の蘭学の師である坪井信道が継承した学統はどのようなものであり、それをどのように展開させ、さらに、萩藩医として、どのように萩藩に蘭学の移植基盤をきづいたか、あきらかにすることを課題とした。

漢方医が『傷寒論』などの漢方医書に依拠するように、西洋医は西洋医書に依拠する。訳医書により医療活動にたずさわる西洋医もいたが、宇田川・坪井の学統は、オランダ語でしるされた西洋薬医書を渉猟する。天保期になると、オランダ語学習のための辞書や文法書が整備され、原典主義が顕著になるが、宇田川・坪井の学統はその中心的な存在である。宇田川・坪井の学統について検討するばあい、どのような医薬書を、どのような理由から訳述したか、問わなければならない。

宇田川玄真は、義父の玄隨の遺志をつぎ、未開拓の分野にふみこみ、解剖書はもとより、内科書、眼科書、小児科書、さらに薬書を渉猟する。しかも、『遠西医範』のように、特定の原書を翻訳するのではなく、数冊の解剖学書を閲読し、30巻におよぶ浩瀚な稿本ものこす。玄真は、蘭書講読が普及浸透していない現状では、みずから臨床医としてひとりひとりの患者の治療にあたるよりは、訳著をとおし西洋医学の治療法を身につけた医者がひろく治療にあたるほうが効果的であると考え、西洋医薬書の訳述に専念する。玄真は、幾多の訳業をとおし、オランダ語を習得していない医者に西洋医学の知識を提供することによって、また西洋医学の知識を身につけた西洋医を輩出することによって、近代医学の基礎をきずく。

玄真は、蘭書翻訳の草分けとして、ふたつの画期的な試行をこころみている。ひとつは、訳文を漢字表記からカタカナ表記へとかえた点である。『解体新書』や『重訂解体新書』が漢文体であるのにたいし、『医範提綱』は本文は漢文体であるが、註文や釈義は漢字仮名まじり文でしるされる。それは、玄隨の『西説内科撰要』の文体をひきついだものである。もうひとつは、訳語を創作した点である。当時の蘭学者が蘭書の翻訳にあたり苦慮したのは、西洋医学には漢方医学の術語とはかけはなれた概念をどのように翻訳するかという点である。たとえば、『解体新書』では、腺を翻訳することができないために「機里爾」<sup>キリイル</sup>，“klier”というオランダ語を発音どおりに漢字で表記していた。玄真は、漢方医学にあてはまるものはそのままちいるが、あたらしい概念に逢着したばあいには、熟慮したうえで漢語の知識を駆使し、訳語を考案する。膾や腺といった国字、すなわち和製漢字をつくりだす。こうしたこころみは、日本に西洋医学が普及浸透するためのこころみである。

玄真の訳業は網羅的とも思えるほどに間口がひろい。玄真が西洋医学の系統性をどこまで把握していたかは判断できないが、おぼろげながらも西洋医学の系統性を認識していたと思われる。それは、玄真が信道に内科診療学書の訳述をすすめたり、最晩年の門人となった青木周弼と緒方洪庵に未開拓の分野であった「原生原病」、すなわち生理学と病理学の原書を

訳述するよう命じたりしたところからもうかがえる。

坪井信道は、文政3(1820)年から文政12(1829)年までのおよそ10年間、玄真に近侍し、「榛齋先生異常ノ厚意」<sup>201)</sup>にあずかる。入門3年後には、玄真のすすめによりプールハーフェの『診断治療箴言』にスヴィーテンが註解をほどこした『ヘルマン・プールハーフェの疾病の診断および治療に関する箴言』の翻訳にとりかかり、文政8(1825)年あるいは翌9年に訳了し、『万病治準』20巻と題する。18世紀前半のライデン学派をひきいるプールハーフェは、「近代診療の定石的な輪郭」をつくりあげる。画期的な臨床医学をまなぶために、ヨーロッパ全土からプールハーフェのもとに蝟集する。プールハーフェの著作は、19世紀中葉にもヨーロッパ医学の中心であるパリでも命脈をたもっていた。信道は最先端の臨床医学を日本に導入しようとしたことになる。

信道は、『万病治準』の訳述中に西洋医学の内科診断学書の構想をねる。文政9(1826)年12月に『診候大概』を脱稿する。『診候大概』は、訳述したものではないが、『万病治準』の訳了後、内容を咀嚼し、内科診断のために要点をまとめたものである。『万病治準』蒼龍館文庫本には、翻訳することができない部分であろう、オランダ語が書き込まれた部分が散見される。訳語に自信がない部分であろうか、原語が朱書きされた部分もある。『万病治準』は、オランダ語を習得し、自立した蘭学者としてのエチュードである。しかし、『万病治準』は、そのままでは内科診断学書として臨床で使うことはできない。そのために、信道は西洋医学の内科診断学マニュアルの性格をもつ『診候大概』をあらわす。

信道の訳著に関していえば、訳了脱稿した訳著はすくないが、西洋医薬書を読みあさり、断片的に訳述したものがおおい。その理由としてふたつの点を指摘することができる。ひとつは、信道が坪井塾のテキストとしてつかうために西洋医薬書を訳述したからである。信道は、毎朝、塾生のために解剖学、生理学、病理学、診断学、薬物学などの講義をおこなっていた。講義内容は、西洋医薬書の必要な部分を訳述したものである。信道の訳著が、訳了脱稿したものであっても、版行されることはなく、稿本を筆写したものとしてのこされているのはそのためである。

もうひとつの理由は、可能なかぎりおおくの西洋医学の症例に目をとおそうとしたためである。信道は、難治の病を治癒させるのが医師の職責であり、西洋医薬書が難病治療の方法を提供すると確信していた。そのために、塾生にオランダ語を習得させ、西洋医薬書を読ませるだけでなく、定日には塾生に「医按」を作成させ、それにもとづく臨床授業をおこなう。信道が病院と医学校をかねる坪井塾をひらいたのは、臨床医として医療実践にたずさわると同時に、医学者として蘭書を翻訳する能力を身につけ、おおくの臨床例をまなんだ西洋医をおくりだすためである。

信道は、『病学通論』序からもうかがえるとおおり、すでに解剖学(人身内景)、病理学(原

病)、生理学(原生)といった基礎科学から臨床医学(薬劑治方)にいたる学課課程を明確に認識していたことが窺われる。西洋医学の系統性については、玄真から示唆をえたとおもわれる。さらに、『万病治準』の翻訳にたずさわるなかで、信道は生物学、物理学、化学などの自然科学の成果を医学にとりこみ、生理や病気の概念を機械論的法則で説明しようとしたブールハーフェの医学思想を理解し、その延長線上に、基礎科学の成果を吸収することによって、医学があたらしい展開をみせることを信道は予測していたのであろう。実際、19世紀中葉以降、ドイツ医学は病院医学から研究室医学へと転換し、急成長する。信道が想定する学課課程は、ドイツ医学の学課課程に相応するものである。信道は、病院兼医学校を拠点として、臨床治験に応用するために蘭書を読みあさり、臨床医学の基礎をきずいたとすることができる。ちなみに、「洪庵の医学書翻訳の発想」は、坪井信道や宇田川玄真から影響をうけ、系統性がみられる<sup>202)</sup>。

宇田川・坪井の学統は、蘭書を翻訳したり、数冊の蘭書を一冊の訳著にまとめたりする原典主義を基本とする。したがって、まずオランダ語を習得しなければならない。そのうえで、漢方医学の知識を駆使し、日本語に訳さなければならない。宇田川・坪井の学統は、原典主義、系統性、臨床応用性の3点に特徴があるといえることができる。

つぎに、信道は萩藩にどのように蘭学の移植基盤をきずいたのであろうか。第1に、信道と萩藩は深川という地縁によりむすびつく。信道の居宅と萩藩の下屋敷がおなじ深川の近所にあったために、神道は藩邸詰めの萩藩士の診療のために藩邸に出入りしていた。信道は、天保9(1838)年以降、萩藩の藩政改革を唱導する村田清風や萩藩主側医の能美洞庵と親交をむすぶ。第2は、清風が推進する藩政改革の枠組みのなかで、信道が萩藩籍にくみいれられる段階である。信道は、天保9(1838)年に正式に江戸勤番の萩藩士の診療を嘱託される。天保13(1842)年には萩藩医に補任され、俸禄を下付される。信道は、江戸定府として藩邸外居住をみとめられ、従来どおり病院兼医学校を拠点とした活動にたずさわる。

第3は、19世紀はじめからの異国船の来航やアヘン戦争の勃発により対外危機感がつのり、萩藩も積極的にオランダ語に堪能な蘭学者の獲得にのりだす段階である。弘化元(1844)年、信道は萩藩の内用掛に任じられ、海防策について献策するよう命じられる。天保9(1838)年には、萩藩領出身の信道門生の青木周弼が信道と能美洞庵の推挽により萩藩医に登庸され、天保11(1840)年9月の藩医学校の創設後、蘭学教授として海外情勢や海防策に関する蘭書を閲読していた。周弼は、西洋医としてではなく、蘭学者としての資質・能力を評価され、藩医に登用される。弘化2(1845)年には、伊東玄朴の象先堂に寄寓していた周弼の美弟研蔵も内用掛に任じられ、信道とともに海防策について献策することになる。

しかし、医学者・臨床医として病院兼医学校に固執する信道がみずから海防に関する蘭書を閲読したとは思われない。当時、西洋にひらかれた眼をもつのは、オランダ語原書を解読

できる蘭学者だけである。信道は、西洋医書を渉獵するうちに西洋医学の背後にある西洋文明に関する洞察をふかめ、海外情勢についても知見を得ていたはずである。しかし、信道ははばひろい蘭学者の人脈を駆使し、萩藩に優秀な蘭学者をおくりこむという役割を演じたのではないであろうか。

宇田川・坪井の学統は、信道が萩藩におくりこんだ青木周弼の唱導のもとで萩藩医学館に根をおろす。萩藩医学館は、医学館、済生堂、好生館、好生堂と改称する過程において漢方医学を基礎科学化し、西洋医学の研究教育機関へと変貌する。萩藩医学館から分派した西洋兵学の部門は、当初は周弼がになっていたが、弘化4(1847)年以降、西洋書翻訳御用掛から西洋学所をへて、博習堂に改称する。信道や周弼の門から巣立った松村太仲、東条英庵、松島剛藏などが西洋兵学部門の中樞をになう。

## 【註】

- 1) 「少壯之面々え御談し書」, 「戊(嘉永3年)十一月十日」, 山口県教育会編刊, 『村田清風全集』上巻, 昭和36年(マツノ書店, 昭和60年復刻), 343頁。
- 2) 今村亮編, 『洋方医伝』, 明治17年(青史社, 1980年復刻), 38~40頁。
- 3) 『醫業成立沙汰控』, 山口県公文書館所蔵。
- 4) 「西洋学御引立一件沙汰控」, 山口県文書館所蔵。
- 5) 杉本つとむ, 『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅱ, 蘭学者による蘭語の学習とその研究, 早稲田大学出版部, 1977年, 586頁。
- 6) 小沢清躬, 『蘭学者川本幸民』, 川本幸民顕彰会, 昭和23年, 16~17頁。
- 7) 塩谷宏陰撰, 「誠軒坪井先生墓傍銘」, 「坪井信道所都太郎松尾多勢履歷一件」, 山口県文書館所蔵。
- 8) 坪井信良摘記, 「示児安貞」, 「坪井信道所都太郎松尾多勢履歷一件」。「示児安貞」は、信道が9歳になった長男信友(安貞), のちの二代信道にあたえた自伝的家訓である。
- 9) 同上。
- 10) 笠井助治, 『近世藩校に於ける学統学派の研究』下, 吉川弘文館, 平成6年(昭和45年第1冊), 1780頁。
- 11) 大塚敬節, 『漢方医学』, 創元社, 2001年, 68頁。
- 12) 『近世藩校に於ける学統学派の研究』下, 吉川弘文館, 1759~1760頁。
- 13) 「閑居養痾」第一, 『懐旧楼筆記』巻9, 日田郡教育会, 『増補淡窓全集』上巻, 思文閣, 昭和46年(大正14年初版), 112頁。
- 14) 「咸宜園門人出身地別人員調」, 日田郡教育会, 『増補淡窓全集』下巻, 思文閣, 昭和46年(昭和2年初版), 1~3頁。
- 15) 青木一郎編著, 『坪井信道詩文及書翰集』第一部, 岐阜県医師会, 昭和50年, 39~40頁。
- 16) 『淡窓日記』巻之一上, 日田郡教育会, 『増補淡窓全集』中巻, 思文閣, 昭和46年復刻(大正14年初版), 6頁。
- 17) 『淡窓日記』巻之二下, 同上書, 15~16頁。
- 18) 『坪井信道詩文及書翰集』第一部, 48頁。
- 19) 文化11年8月17日, 『淡窓日記』巻之二下, 『増補淡窓全集』中巻, 28頁。
- 20) 文化11年9月25日, 同上書, 31頁。
- 21) 文化11年5月6日, 同上書, 21頁。
- 22) 『懐旧楼筆記』巻5, 『増補淡窓全集』上巻, 53, 55頁。
- 23) 『懐旧楼筆記』巻16, 同上書, 201頁。

- 24) 同上。
- 25) 加藤周一, 「明治初期の翻訳——何故・何を・如何に訳したか」, 加藤周一・丸山真男校注, 『翻訳の思想』, 日本近代思想大系15, 岩波書店, 1991年, 371頁。
- 26) 「示児安貞」。
- 27) 同上。
- 28) 大槻玄沢撰, 『蘭訳梯航』 卷之上, 出版年不明, 出版者不明, 出版地不明, 早稲田大学図書館所蔵, 4～5頁。活字本。
- 29) 杉田玄白, 杉田玄端・杉田廉卿序, 『蘭学事始』 下之卷, 明治2年, 天真楼, 印記: 大槻文庫, 早稲田大学図書館所蔵。
- 30) 我爾徳兄著, 宇田川玄随訳, 桂川甫周校閲, 『内科撰要』 序, 寛政8(1796)～9年, 須原屋市兵衛, 早稲田大学図書館所蔵。
- 31) 杉本つとむ, 『江戸の阿蘭陀流医師』, 早稲田大学出版部, 2004年, 127頁。
- 32) 石田純郎, 『緒方洪庵の蘭学』, 思文閣出版, 1992年, 191頁。
- 33) 『蘭学事始』 下之卷。
- 34) 『江戸の阿蘭陀流医師』, 127頁。
- 35) 杉本つとむ, 「『蘭訳弁髦』に関する考察——宇田川玄随とその蘭語学」, 『武蔵野大学紀要』 6号, 1971年3月, 66頁。
- 36) 服部隆, 「江戸時代のオランダ語研究における「助語・助詞」——宇田川玄随『蘭訳弁髦』・中野柳圃『助詞考』を中心に」, 『上智大学国文学科紀要』 24, 2004年1月, 124頁。
- 37) 「大槻茂質撰, 『蘭学梯航』 卷之上, 出版年不明, 出版者不明, 出版地不明, 早稲田大学図書館所蔵, 23頁。活字本。
- 38) 『蘭学事始』 下之卷。
- 39) 同上。
- 40) 『蘭訳梯航』 卷之上, 1頁。
- 41) 「修學」, 大槻茂質撰, 『蘭学階梯』 卷下, 天明3(1783)年跋, 出版年不明, 出版者不明, 出版地不明, 早稲田大学図書館所蔵。
- 42) 『蘭訳梯航』 卷之上, 25～26頁。
- 43) 同上, 26頁。
- 44) 藤林淳道(普山), 『蘭学選』, 文化7(1810)年跋, 出版者不明, 出版地不明, 早稲田大学図書館所蔵。
- 45) 斎藤信, 「稲村三伯(海上随鷗)——彼の生涯と『波留麻和解』研究」, 『名古屋市立大学教養部紀要・人文社会研究』 第8巻, 昭和38年5月, 9頁。
- 46) ハルマ原著, 稲村三伯訳編, 『江戸ハルマ』 27冊, 寛政8年刊, 早稲田大学図書館所蔵。
- 47) 松平齐民収集, 『芸海余波』 第10集, 寛政10(1798)年, 早稲田大学図書館所蔵。
- 48) 『蘭訳梯航』 卷之下, 15～16頁。
- 49) 同上, 11頁。
- 50) 「序」, 馬場穀里訳, 杉田恭卿・高須子成録, 浅越子讓校, 『和蘭文範摘要』 卷之上, 文化11(1814)年序, 写本, 早稲田大学図書館所蔵。
- 51) 増岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏, 岩波講座『言語の科学』 5 文法, 岩波書店, 1997年, 4頁。
- 52) H・ドゥーフ, 永積洋子訳, 『ドゥーフ日本回想録』, 雄松堂出版, 2003年, 144頁。
- 53) 野村立栄, 『免帽降乗録』, 自筆本(電子複写), 名古屋大学附属図書館医学分館所蔵。
- 54) 宇田川榕菴, 『宇田川榕自叙年譜』, 出版年不明, 書写年不明, 写(自筆), 早稲田大学図書館所蔵。
- 55) 幸田正孝, 「野村立栄・羽栗三圭(吉雄常庵)・富永晋二——『免帽降乗録』と江戸の蘭学徒」, 『豊田工業高等専門学校研究紀要』 第35号, 2002年11月, 244頁。
- 56) 穂亭主人編, 安政元(1854)年序刊, 国立国会図書館所蔵。
- 57) 宇田川玄真訳, 諏訪俊筆記, 『医範提綱』 卷之一, 文化2(1805)年序, 青藜閣, 早稲田大学図書館所蔵。
- 58) 大鳥蘭三郎, 『医学書誌論考』, 思文閣出版, 昭和62年, 200頁。

- 59) 『江戸の阿蘭陀流医師』, 140～141頁。
- 60) 宇田川玄真編, 新井令恭・重欧堂鐫, 『医範提綱内象銅板図』, 文化5(1808)年, 風雲堂, 早稲田大学図書館所蔵。
- 61) 「凡例」, 宇田川玄真, 宇田川榕庵校補, 『遠西医方名物考』卷之一, 文政5(1822)年榕庵序, 風雲堂蔵版, 青藜閣(江戸浅草茅町)発兌, 早稲田大学図書館所蔵。
- 62) 『緒方洪庵の蘭学』, 253～255頁。
- 63) 石田純郎, 『オランダにおける蘭学医書の形成』, 思文閣出版, 2007年, 185頁。
- 64) 「序」, 杉田立卿訳述, 不冷吉撰, 不路乙斯重訂, 『眼科新書』卷之一, 文化12(1815)～13年, 群玉堂(心斎橋筋博労町), 早稲田大学図書館所蔵。
- 65) 宇田川榛斎訳述, 『小児諸病鑒法治法全書』, 弘化2(1845)年宇田川榕菴装丁, 早稲田大学図書館所蔵。下線部, 原文割注。
- 66) 「凡例」, 宇田川玄真, 宇田川榕庵校補, 『遠西医方名物考』卷之一, 文政5(1822)年榕庵序, 風雲堂蔵版, 青藜閣, 早稲田大学図書館所蔵。
- 67) 石田純郎, 『蘭学の背景』, 思文閣出版, 1988年, 227頁。
- 68) 宇田川榛斎訳述, 宇田川榕菴校補, 『新訂増補和蘭薬鏡』18巻, 文政11(1828)年序, 青藜閣, 早稲田大学図書館所蔵。
- 69) 「凡例」, 『遠西医方名物考』卷之一。
- 70) 『蘭学の背景』, 227頁。
- 71) 我爾徳兄著, 宇田川玄随訳, 桂川甫周校閲, 丹波廉夫序, 『増補重訂内科撰要』12巻, 寛政8(1796)～9(1797)年, 須原屋市兵衛(江戸室町), 早稲田大学図書館所蔵。
- 72) 我爾徳兄著, 宇田川玄随訳, 宇田川玄真校註, 藤井方亭増訳, 『増補重訂内科撰要』18巻, 文政5(1822)年玄真序, 種玉堂(大坂心斎橋通北久太郎町), 早稲田大学図書館所蔵。
- 73) 『ドゥーフ日本回想録』, 211頁。
- 74) 『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅱ, 854～856頁。
- 75) 松尾耕三, 『近世名医伝』卷二, 北沢正誠・今村亮・松尾耕三編著, 『蘭学者伝記資料』, 青史社, 1980年(明治19年初版), 18丁。
- 76) 『宇田川榕自叙年譜』。
- 77) 同上。
- 78) 『医範提綱』卷之一。
- 79) 『宇田川榕自叙年譜』。
- 80) 坪井信道書翰, 岡研介宛, 文政13年11月10日付, 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 44～48頁。
- 81) 『江戸の阿蘭陀流医師』, 127頁。
- 82) 「示児安貞」。
- 83) 「先考行實遺漏」, 「坪井信道所郁太郎松尾多勢履歴一件」, 山口県文書館所蔵。筆記者の氏名は明示されないが, 「示児安貞」と筆跡がおなじであるところから, 坪井信道の女婿である信良がしるしたものと思われる。
- 84) 杉本つとむ, 『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅳ, 早稲田大学出版部, 1981年, 590頁。
- 85) 『福翁自伝』, 慶應義塾, 『福澤論吉全集』第7巻, 昭和34年, 70頁。
- 86) 「譯述書目」, 「先考行實遺漏」。
- 87) 蒲爾花歌著, 斯微旬註, 坪井信道訳, 『内病論』第一, 5巻2冊, 書写年不明, 写本, 早稲田大学図書館所蔵。
- 88) 川喜田愛郎, 『近代医学の史的基盤』上, 岩波書店, 1977年, 350頁。
- 89) クレインス・フレデリック, 『江戸時代における機械論的身体観の受容』, 臨川書店, 平成18年, 295頁。
- 90) 同上書, 349頁。
- 91) 同上書, 321頁。
- 92) 『近代医学の史的基盤』上, 352頁。
- 93) 『江戸時代における機械論的身体観の受容』, 298頁。
- 94) 『近代医学の史的基盤』上, 372頁。
- 95) 九州大学附属図書館医学分館貴重古書コレクション所蔵。

- 96) 『近代医学の史的基盤』上, 351頁。
- 97) 『江戸時代における機械論的身体観の受容』, 299～301頁。
- 98) 阿知波五郎, 『ヘルマン・プールハーヴェ (1668-1738)—その生涯, 思想, わが蘭医学への影響』, 緒方書店, 昭和44年, 282頁。
- 99) 蒲爾花歌著, 斯微句註, 坪井信道訳, 『蒲爾花歌万病治準』20巻, 写本。近世史料館の袖吉氏はじめ, 館員の方には, 閲覧・撮影にさいして格別のご配慮をいただいた。以下, 『蒲爾花歌万病治準』については蒼龍館文庫本から引用する。蒼龍館文庫本に朱で書き込まれた訓点, 句読点をそのまま付す。
- 100) 『江戸時代における機械論的身体観の受容』, 350頁。
- 101) 高野長英 (讓), 『西説医原枢要』(外題: 医原枢要) 巻1, 天保3年, 京都大学附属図書館富士川文庫所蔵。読点筆写。
- 102) 『坪井信道序』, 緒方章訳述, 宇田川瀛・坪井信道序, 『病学通論』, 弘化戊申仲春序, 出版年不明, 河内屋卯助 (大坂), 早稲田大学図書館所蔵。訓点筆写。
- 103) 川喜田愛郎, 『近代医学の史的基盤』下, 岩波書店, 1977年, 660～670頁。
- 104) 『近代医学の史的基盤』上, 351頁。
- 105) 坪井信道書翰, 藤野勤所宛, 文政11年2月12日付, 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 84～86頁。
- 106) 川喜田愛郎, 『近代医学の史的基盤』下, 岩波書店, 1977年, 619頁。
- 107) 『緒方洪庵の蘭学』, 73頁。
- 108) 扶歇蘭土著, 坪井信道重訳, 『扶歇蘭土神經熱論』, 天保9 (1838)年, 山本義敬写, 早稲田大学図書館所蔵。
- 109) 同上。
- 110) 富士川游, 『日本医学史綱領』2, 平凡社, 1974年, 103頁。
- 111) 大槻如電, 『新撰洋学年表』, 伯林社書店, 昭和38年再版 (昭和2年初版), 111頁。
- 112) 高岡市中央図書館清水家文書所蔵。清水家は越中高岡において元禄年間から薬種業をいとなむ。『日習堂診候大概』は, 10代清水藤右衛門梅頭が書写したものである。
- 113) 「診候大概序」, 『坪井信道詩文及書翰集』第一部, 309～311頁。
- 114) 青木一郎訳注, 『診候大概』, 岐阜県医師会, 昭和53年。以下の記述は本書による。
- 115) 『日本医学史綱領』2, 103頁。
- 116) 『近代医学の史的基盤』下, 624頁。
- 117) 『ヘルマン・プールハーヴェ (1668-1738): その生涯, 思想, わが蘭医学への影響』, 282頁。
- 118) 「贈\_同学\_」, 壬辰夏日 (天保3年), 『坪井信道詩文及書翰集』第一部, 291～293頁。
- 119) 箕作阮甫纂述, 坪井信道序, 『泰西名医彙講』二輯, 序, 天保8 (1837)年, 須原屋伊八 (江戸), 京都大学附属図書館所蔵。読点筆写。
- 120) 「入門式」, 青木一郎, 『坪井信道の生涯』, 杏林温故会, 昭和46年, 226～227頁。
- 121) 「塾則」, 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 154～156頁。
- 122) 同上。
- 123) 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 150頁。
- 124) 「先考行実遺漏」。下線部, 原文割注。
- 125) 岡原義二, 『青木周弼』, 青木周弼先生顕彰会, 大空社, 1994年 (昭和16年初版), 94頁。
- 126) 赤松範一編注, 『赤松則良半生談』, 平凡社, 1977年, 13～14頁。
- 127) 緒方富雄, 「坪井信道塾の研修記録としての前田信輔筆『日習堂医按』」, 『日本医学史雑誌』第16巻第3号, 昭和45年6月, 94頁。
- 128) 『赤松則良半生談』, 15頁。
- 129) 『坪井信道の生涯』, 92頁。
- 130) 「薬室定則」, 同上書, 229～230頁。
- 131) 『江戸時代蘭語学の成立とその展開』II, 1142頁。
- 132) Maatschappij tot nut van't Algemeen 編, 『和蘭文典』前編, 天保13 (1842)年, 箕作氏 (美州): 1822年刊第2版の翻刻, 早稲田大学図書館所蔵。
- 133) Maatschappij tot nut van't Algemeen 編, 『和蘭文典』後編, 嘉永元 (1848)年, 箕作氏 (美州): 1810年ライデン刊の翻刻, 早稲田大学図書館所蔵。

- 134) 『坪井信道の生涯』, 82頁。
- 135) 『青木周弼』, 93~94頁。
- 136) 大槻如電, 『新撰洋学年表』, 伯林社書店, 昭和2年(昭和38年再版), 114頁。下線部, 原文割注。
- 137) 『蘭学者川本幸民』, 16~17頁。
- 138) 『新撰洋学年表』, 118頁。
- 139) 斎藤信, 『日本におけるオランダ語研究の歴史』, 大学書林, 昭和60年, 181頁。
- 140) 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 308~316頁。
- 141) 松田清, 「坪井家旧蔵本の洋学資料」, 『静脩』第31巻第2号, 1994年9月, 2頁。
- 142) 吉岡秋義, 「『仏郎察辞範』と『和仏蘭対訳語林』に就いて」, 『長崎大学教養部紀要』人文科学5, 1965年3月, 91頁。
- 143) 『蘭学階梯』巻下。
- 144) 『江戸時代蘭語学の成立とその展開』II, 1144頁。
- 145) 『福翁自伝』, 慶66頁。
- 146) 長与専斎, 長与称吉編, 『松香私志』上巻, 明治35年, 12頁。
- 147) 茂住実男, 「会読について」, 『大倉山論集』第3輯, 平成5年12月, 100頁。
- 148) 「徂徠先生答問書」下, 島田虔次編, 『荻生徂徠全集』第1巻, みすず書房, 1973年, 468頁。
- 149) 「会読について」, 100頁。
- 150) 『懐旧桜筆記』, 『増補淡窓全集』上巻, 138頁。
- 151) 『赤松則良半生談』, 15頁。
- 152) 松田清, 『洋学の書誌的研究』, 臨川書店, 平成10年, 670頁。
- 153) 阪谷朗廬撰, 「寺地強平先生碑」, 五弓豊太郎編, 『事実文編』第四, 国書刊行会, 明治44年, 179~180頁。
- 154) 『福翁自伝』, 68~69頁。
- 155) 「蜚英館学規」, 亀井南冥・昭陽全集刊行会, 『亀井南冥・昭陽全集』第一巻, 葦書房, 昭和53年, 380頁。
- 156) 『懐旧桜筆記』, 『増補淡窓全集』上巻, 138頁。
- 157) 坪井信道書翰, 藤野勤所宛, 文政11年2月12日付, 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 86頁。
- 158) 松田清, 『洋学の書誌的研究』, 臨川書店, 平成10年, 670頁。
- 159) 『蘭学の背景』, 232頁。
- 160) 『緒方洪庵の蘭学』, 34~35頁。
- 161) 緒方富雄, 『緒方洪庵伝』, 岩波書店, 昭和17年, 22~23頁。
- 162) 筆写は『醫療正始:附醫院類案』に「医院類聚」が附録として付されていると推測したが, 合綴されていなかった。京都大学附属図書館特殊資料掛の吉田弘子氏にたずねたところ, 後日, 玄朴重訳の『醫療正始:附醫院類案』には「医院類聚」が合綴されていず, 富士川文庫には, べつに箕作阮甫・青木周弼訳の『医院類案』が所蔵されているとの連絡をいただいた。
- 163) 尾佐竹猛, 「黒川良安の事蹟に就て」, 『中外医事新報』第1269号, 昭和14年7月, 266頁。
- 164) 坪井信道書翰, 大久保黄齋宛, 天保12年7月16日付, 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 38~39頁。
- 165) 坪井信道書翰, 岡研介宛, 文政13年11月10日付, 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 44~48頁。
- 166) 小川重弥子, 「天保~嘉永期長州藩『他国修業』生の動向をめぐって」, 『福岡教育大学紀要』第53号, 第2分冊 社会科編, 2004年2月, 27~31頁。
- 167) 人文社編集部編 日本地図選集刊行委員会, 『嘉永・慶應江戸切繪圖全』, 人文社, 1990年。
- 168) 田中助一, 『防長医学史』下巻, 聚海書林, 昭和59年(昭和28年初版), 282~284頁。
- 169) 「坪井信道所郁太郎松尾多勢履歴一件」。
- 170) 「西洋学御引立一件沙汰控」。
- 171) 「御講武一件上書」, 天保11(1840)年9月, 山口県教育会編刊, 『村田清風全集』上巻, 昭和36年(マツノ書店, 昭和60年復刻), 203頁。
- 172) 林子平述, 『校正海国兵談』巻之一, 嘉永6(1853)年序, 出版者不明, 出版地不明, 早稲田大学図書館所蔵。
- 173) 末松謙澄, 『修訂防長回天史』第一編, 末松晴彦, 大正10年修訂再版(明治44年初版, マツノ書



- 店, 平成3年復刻), 147~148頁。
- 174) 山口県編刊, 昭和43年, 174頁。
  - 175) 石川卓美編, 『山口県近世史研究要覧』, マツノ書店, 昭和51年, 88頁。
  - 176) 「海防糸口」, 安政元年9月, 『村田清風全集』上巻, 462頁。
  - 177) 林子平述, 『校正海国兵談』巻之一, 嘉永6(1853)年序, 出版者不明, 出版地不明, 早稲田大学図書館所蔵。
  - 178) 坪井信道書翰, 小石元瑞宛, 弘化3(1846)年閏5月28日付, 山本四郎, 「坪井信道と小石元瑞」, 『蘭学資料研究会研究報告』第46号, 1959年4月, 62頁。
  - 179) 『山口県近世史研究要覧』, 129頁。
  - 180) 『防長医学史』下巻, 299頁。
  - 181) 「先考行実遺漏」。傍線部, 原文割注。句読点筆写。
  - 182) 坪井信道書翰, 緒方洪庵宛, 天保13(1842)年1月7日付, 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 203頁。
  - 183) 小川重弥子, 『幕末期長州藩洋学史の研究』, 思文閣出版, 1998年, 167頁。
  - 184) 『修訂防長回天史』第一編, 344頁。
  - 185) 坪井信道書翰, 小石元瑞宛, 弘化2(1845)年10月24日付, 「坪井信道と小石元瑞」, 64頁。
  - 186) 『修訂防長回天史』第一編, 344頁。
  - 187) 同上書, 253頁。
  - 188) 「附記」, 『青木周弼』, 649頁。
  - 189) 「西洋学御引立一件沙汰控」。
  - 190) 「文武御興隆沙汰控」, 山口県文書館所蔵。
  - 191) 坪井信道書翰, 小石元瑞宛, 弘化3(1846)年閏5月28日付, 「坪井信道と小石元瑞」, 66頁。
  - 192) 坪井信道書翰, 緒方洪庵宛, 弘化4(1847)年5月22日付, 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 241~242頁。
  - 193) 箕作省吾, 『坤輿図識』巻之二, 弘化4(1847)年, 須原屋伊八, 早稲田大学図書館所蔵。下線部, 原文割注。
  - 194) 晁嬰(高野長英), 『戊戌夢物語』, 嘉永6(1853)年写, 早稲田大学図書館所蔵。『北米利幹書翰』合綴。
  - 195) 坪井信道書翰, 小石元瑞宛, 弘化3(1846)年閏5月28日付, 「坪井信道と小石元瑞」64~65頁。
  - 196) 「和蘭醫術採用ノ旨ヲ達ス」, 安政5年7月6日, 吉野真保, 『嘉永明治年間録』巻七下, 安政5年戊午, 甫喜山景雄, 明治16年。
  - 197) 「先考行実遺漏」。訓点筆写。
  - 198) 「異船防禦に付兼々覚悟可仕置条々申談草稿」, 弘化4年8月, 『村田清風全集』上巻, 341頁。
  - 199) 坪井信道書翰, 村田清風宛, 弘化4(1847)年日付不明, 『坪井信道詩文及書翰集』第二部, 60~61頁。
  - 200) 『幕末期長州藩洋学史の研究』, 167頁。
  - 201) 「示児安貞」。
  - 202) 『緒方洪庵の蘭学』, 31頁。

Zusammenfassung

Leibarzt des Hagi-Daimyats Shindō Tsuboi

——über den Prozeß der Einführung der Holland-Wissenschaft im Hagi-Daimyat——

Jun Morikawa

Shindō Tsuboi war einer der drei bedeutenden Holland-Wissenschaftler in der Mitte des 19. Jahrhunderts. Er erzog nicht nur die Schüler aus dem Hagi-Klan als selbständigen Holland-Wissenschaftler, sondern auch führte als Leibarzt des Hagi-Daimyats die Holland-Wissenschaft in den Hagi-Klan ein. Die Aufgabe dieser Studie ist zu erklären, welche akademische Tradition er erbe, wie er die Tradition entwickelte, und wie er die Holland-Wissenschaft in den Hagi-Klan einführte.